

## 同時代史としての団塊世代 (前編)

— その来し方そして現在 —

天 沼 香

### プロローグ

「団塊の世代」を考え直す 本稿において、私は、「団塊の世代」の来し方を見直し、現在を見直し、その近未来を考え直そうとしている。なぜか。

それは、同世代が、圧倒的な数の多さゆえに社会的に目立つ存在だったように思われ、この世代のライフサイクルの展開とともに常に新しい何かが起こり、それゆえに節目節目で注目を浴び続けた日本近現代史上でも希有な世代だったように思われてきたことに対して、私は若干の疑念を持っているからに他ならない。

果たして本当にそうだったのだろうか。巷間、言われているほどに、他世代とは異なる特徴を持つ世代だったのだろうか。マスコミが喧伝するほどに、この世代は、その行く先々で物議を醸し出す存在だったのだろうか。

「団塊の世代」という言葉が存在しなければ、同世代は、これほどまでに一塊りにされて注目され続けるようなことにはならなかったのではないか、とすら考えている。「団塊の世代」という強烈な造語が、同世代の実態より、イメージを先行させてしまっている。世が挙げて、堺屋太一という希有な造語の才能の魔術にまんまと踊らされているような感が否めないのだ。

とはいえ、それが全く実態を伴わないものであるなら、歴史の流れのなかで、いずれは忘れ去られてしまうだろう。「団塊の世代」という言葉が、これほどまでに、世間に根付いていることは、取りも直さず、その言葉が、少なくとも実態の一端を端的に示していることの証左と言わねばなるまい。

一つの世代を歴史的な視座から考察する事は、それほど一般的な事ではない。そもそも世代論が、どこまで妥当性のあるものなのかとい

う議論もある。しかし、これに関しては、民族性論や国民性論に一定限の有効性がある（この点に関して詳しくは、拙著『「頑張り」の構造～日本人の行動原理』[1987、吉川弘文館]を参照されたい）のと同様の意味合いがあるものとして話を進めよう。

すなわち、一つの世代とは言っても様々な人々がいるわけだが、それはともかくとして、ある時期に、同じ時代の空気を吸い、同様な潮流のもとで考え、行動し、生活を営んだ存在としての共通項を持つ人々として一つの塊、集団、全体として一括りで捉えて論じる事は、決して不可能な事ではないし、意味のある事と考えられるからである。

「団塊の世代」あるいは「なんとも因果な世代」

「団塊の世代」……。この世代ほど、一括りにされ、毀誉褒貶の激しい評価に晒された世代は他には例を見ない。

「団塊の世代」……。この言葉に対する受け止め方、その世代の実態に関する認識は、巷間、相当なまでにステレオタイプ化されている。その反面……、

「団塊の世代」……。この言葉に対する受け止め方、その世代の実態に関する認識は、巷間、諸々のかたちで存在し、各人がかなり恣意的にその語を用いている。

この二律背反は、ある意味では当然の事である。この世代は、まだ生存中の世代であり、評価の定まりようがない存在だからである。そうして、彼らは、高度経済成長期が終焉して以降の日本社会の様々な分野で中核を成してきた存在であり、時を経て、「2007年問題」の主人公として、社会問題視された存在だからである。

この世代は、1970年代、80年代、その実労働年代前期においては、一時的不況から安定成長への移行期以降の日本経済を建て直す役割を

果たし、1990年代から21世紀初頭におけるその実労働年代後期には、バブル経済運営の中核を担う牽引車としての役割を果たしたにもかかわらず、バブル崩壊後には人的リストラの対象にされ、2007年以降の一斉定年退職以降、その老後においては、膨大な年金受給者として、また要介助・介護予備軍として、すなわち次世代に負担のかかる～厄介者のような～存在として認識される。

誠に、因果な世代といえよう。そもそも・・・

「団塊の世代」・・・この世代ほど、同時期における出生者数の多い世代は他に例をみない。その故に、出生時からベビーブームの申し子として、ベビーブーマーと称されてきた。その故に、この世代ほど、その生涯を通して、常に激しい競争に晒され続けた世代もあまりない。小学校受験、中学受験、高校受験、大学受験、就職、職場での昇進等々、この世代は人生の行く先々で激しい競争に直面したのだった。

「団塊の世代」は、そんなところから、そのライフ・サイクルの折々において、自らが好むと好まざるとに関わらず、また意図する、しないに関わらず、社会的に注目されることが多かった。

一つの世代に対して、一人の作家が偶々、自らの一つの作品名に用いた呼称が、これほどまで長きに渡って江湖に広く受け入れられ、世間で一般的な用語として用いられたばかりでなく、歴史的用語、社会科学的用語としても使用されるに至ったというのは稀少な事である。

逆に言うと、一人の作家の巧みな造語に、世間がすっかり幻惑され続けてきたともいえよう。そんな事へのささやかな反発心から、私はかつて担当していた新聞のコラムに以下のような一文を呈した事がある。

「団塊の世代」って言うな！ 【昨今、「団塊の世代」、「団塊の世代」と世間がかまびすしい。

「団塊の老後はバラ色か悲惨か」、「『団塊の世代』はこれからがおもしろい」等々と題して特集記事を組む総合誌、2007年に始まる「団塊の世代」の退職による諸問題を論じる専門誌等が陸続として現れ、「団塊の世代」は各誌の格好の論評の対象になっている。

各紙の報道でも、単発や連載で「団塊の世代」に焦点を当てた記事が目立つ。「団塊の世代」の、これまで、そしてこれからの生き方についての迫真的ルポ記事、「団塊の世代」論、団塊世代女性のファッションやお洒落に関する記事等々。

某紙は、「団塊の世代に熱い眼差しを送る『おむつ業界』」といった見出しで、～少子化に伴って、おむつ着用のお得意様である赤ちゃんが減り、その結果、おむつ需要の漸減傾向に悩む業界が、近未来における団塊の世代の高齢化によって、おむつ需要が急激に盛り返すことを期待している～云々というような記事を掲載していた。

まるで「団塊の世代」が早く寝たきり老人になることを期待しているかのごとくで、団塊最末期世代の私としては、心穏やかならず思ったこともあった。

「団塊の世代」の定年退職後をねらって、その膨大な退職金、年金、老後資金、預貯金を消費に回させようと画策する向きも多い。若い世代では、「団塊の世代」の大量退職により、自らの就業のチャンスが増大するといった観点から、この世代の退場を歓迎する向きもある。

すなわち、後続の各世代からは、「団塊の世代」の高齢化を大きなビジネスチャンスとして捉えるような視点が出来（しゅったい）し、定着し始めているのだ。

長らく社会の中核として各方面で中心的な役割を果たしてきたのだから、定年後は、その知識や技術を生かしてボランティア活動に励んでもらいたいといった要望もでている。

ひとつの世代の社会の第一線からの退場がこれほどまでに注目を浴びるのも珍しいが、お節介な話だ。やっとなんか呪縛から解放されるのだから、その先の生き方くらい自由にさせてくれ、要らざる指図は止めてくれと言いたい。

退場時のみならず、この世代は、その人生のライフ・サイクルの折り目折り目で否応なく脚光を浴び続けた。その理由は一にかかって、この世代の人口の多さにあった。

それゆえに、この世代の一挙手一投足は世間の耳目を引くこととなったのだ。生まれた

1947年から49年の頃は、ベビーブームと喧伝され、受験の頃には過激な競争にさらされ、大学入学後は大学闘争の担い手となって注目された。

そのあおりで、私が受験した年には、あの東京大学の入試が中止になるという空前絶後の事態が発生した。その意味、意義は何だったのか。当時、ちょうど東大生で、全共闘系の活動家だった遠縁の男は、「東大出身者が一年、世に出ないという事実は日本社会の行く末に大きな影響を及ぼすことになる」と豪語した。だが、実際には、世間の大勢には何ら影響はなかった。

「団塊の世代」は、大学闘争の後も、就職、昇進等、人生の節目節目で、常に過当な競争にさらされ続けることになる。

そうして退職の頃になると、その膨大な退職金や年金が問題視され、近未来の介護の受益者として厄介者扱いされるようになる。何とも割の合わない世代ではある。

ただし、我々は塊でも、集団主義者でもない。それぞれに個性的な個なのだ。「団塊の世代」と言う堺屋太一の造語がずっと勝手に一人歩きしているだけなのだ。最近、『「ニート」って言うな!』という真面目な書物が出版されたが、それに倣って言うておこう。

『「団塊の世代」って、一括りにして言うな!』。世代論が意味のないものとは、私も思っていないけれども。】(「サンデーコラム」『岐阜新聞』2006年3月12日付朝刊)。

#### とはいえ「団塊」とは言い得て妙な表現

上のように言うてはみたものの、やはり「団塊の世代」という呼称自体は、実に言い得て妙な表現ではある。決して堺屋太一の軍門に下るわけではないが、これだけ江湖に知られた呼称を今更、他の表現に変更する明確な必然性はない。第一、変更を試みるなら、それに要する労力は膨大なものになろう。それだけの労力を投入するくらいなら、むしろ、その表現を、歴史学用語そして社会科学用語としても借用して、語の規定を行ったうえで、その誤ったイメージを改め、その実態に迫る方が生産的である。

という事で、以下、「団塊の世代」の語の規定を行うとともに、その括弧を外して団塊の世

代、団塊世代として論ずる事とする。

そもそも「団塊」とは、多くの辞書では「かたまり」の一言で、その説明を済ませている。やや詳しくは、「岩層中に存在する球状、楕円状、扁平状などの形をなす塊」(『広辞苑』)、「堆積岩中に存在する、周囲より硬いかたまり」(『大辞泉』)といった解説がなされる。つまるところ「かたまり」というのが「団塊」の語義なのである。これ以上、「団塊」を探っても意味はないので、続いて「団塊の世代」を見てみよう。

「ベビーブームの昭和22～25、6年にかけて生まれた世代、他の年齢層に比べて多人数のこの世代が社会の中枢を占めるようになっていることから使われる」(『最新情報語辞典』、1984年初版、永岡書店)

「第二次世界大戦直後の日本において1947年から1949年にかけての第一次ベビーブームで生まれた世代である。作家の堺屋太一が1976年に発表した小説『団塊の世代』によって登場した言葉である」(フリー百科事典『ウィキペディア』2006、<http://ja.wikipedia.org>)

「第2次大戦後、数年間のベビーブームに生まれた世代のこと。堺屋太一が命名し、「昭和22年から26年頃までに生まれた人々」(1947年から1951年ごろまで)という定義をした。人口構造に基づく厳密な定義ではもう少し幅が狭くなる。堺屋太一の著書『団塊の世代』によれば、「日本民族は終戦直後の1947年から1949年につけて、空前絶後の大増殖を行った。この3年間に生まれた日本人は、その直前よりも20%、直後よりも26%も多い」のである。この原義が拡張され・・・次のように分類することもある。

- プレ団塊 1943年～1946年生まれ
- 団塊 1947年～1949年生まれ
- ポスト団塊 1950年～1953年生まれ

(2006、<http://d.hatena.ne.jp>)

『「団塊」』とは、文字通り『かたまり』のことで、団塊世代とは、戦後のベビーブームに誕生した・・・世代の人々をいう。1976年(昭和51)、堺屋太一氏が上梓した小説『団塊の世代』。第2次世界大戦後に出生し(た)・・・この世代が『団塊の世代』と呼ばれるようになったの

は、この後のことである。・・・団塊世代には、1946年（昭和21）～1950年（昭和25）に生まれた世代（というらえ方）と1947年（昭和22）～1949年（昭和24）に生まれた世代というらえ方がある・・・」（東京ガス都市生活研究所「生活レシピ、2004）。

**歴史的存在としての「団塊の世代」** 言うまでもなく、この他にも『イミダス』、『知恵蔵』等々、「団塊の世代」を定義した叙述は数多いが、似たり寄ったりなので、これくらいにして、私自身の「団塊の世代」の規定を明示しておこう。

右のように、「団塊の世代」は、少し広く1946年～50年生まれの人々を指す場合と、少し狭く1947年～49年生まれの人々を指す場合とがある。私は、世代という際には、やはりある程度の年齢の幅を持たせるべきではないかと考えている。

そういう観点からすると3年間を以てひとつの世代とするのはやや狭い見方と言わざるを得ない。加えて、1946年から1950年にかけての出生者数は1037万人で、その後の1951年から55年にかけての出生者数858万人、1956年から60年にかけての出生者数779万人に比べて百数十万人から二百数十万人も多い。

しかも学年暦でいえば、1950年早生まれの人々は、49年4月以降生まれの人々と同学年を構成する。

これらを勘案すると、「団塊の世代」は、1946年から1950年にかけて生まれた人々としたいところではある。

しかし、巷間、話題を呼んでいる所謂「2007年問題」というのは、2007年以降、1947年生まれ、48年生まれ、49年生まれが次々に還暦に達し、定年対象年齢になり、社会の第一線を退いていく事に伴って生じる（可能性のある）、熟練労働者不足、年金制度や社会保障制度の破綻等々の諸問題というように認識されている。

どうやら、既に一般的な理解としては、1947年から49年にかけて生まれた人々を以て、「団塊世代」と考える向きが多いようなのである。

こうしたあれこれを勘案しながら、私は「団

塊世代」を以下のように規定しておきたい。

～第2次世界大戦後、世界的レベルで潮流となったベビーブームは、日本でも1946年から1950年にかけて顕現した。この間に生まれた日本人の新生児は一千万人を優に上回り、その前後の時期に比べて格段に多い。

わけても、1947年から1949年にかけて生まれた人の現在の総数は688万人に上り、その数は日本の全人口の五・四パーセントを占める（2000年度国勢調査結果より・・・したがって、その間に生まれた実数はもっと多数に上ることになる）。

この1947年から49年（より正確には、49年遅生まれと学年を同じくする50年早生まれまでを含む）にかけてのベビーブーマーを、ここでは『団塊世代』として捉えることとする。

数の多さゆえに、この世代は、そのライフサイクルのなかで注目され、また現に、様々な社会現象の主人公になってきた。受験戦争、大学闘争、就職難、ニューファミリー、出世競争、世代間のギャップ、2007年問題等々、20世紀後半から21世紀初頭にかけて生じた諸々の社会問題では、この世代の存在と関わっているものが多い。

それだけに、この世代は、世代論の俎上に乗せられやすい。

そんなところから、1976年、堺屋太一は自らの小説で、この世代を「団塊の世代」と称した。それ以降、諸々の誤解を生じながら、この呼称が巷間に広く流布していったのである。～

以上、「団塊の世代」に関して、歴史的視座からの定義を行ったので、以後は括弧を外して、団塊の世代また団塊世代として論じることとしよう。

ちなみに、私自身も団塊世代最末期（1950年早生まれ）の人間であるから、本書は、何程か自分史的な叙述ともなり、又、何程か自己省察的な叙述ともなろう。もちろん、なによりも客観的な歴史的事実に基づく同時代史叙述ではある。

## [1] 歴史としての団塊世代

### 1. 同時代史の試み

**同時代史は可能か** 「団塊の世代」の人々の多くはまだ生存中である。その世代は、そろそろ社会の第一線から去ろうとはしているけれども、まだまだ各方面で中核的存在として重きを成して頑張っている人たちも多い。

人生という舞台の折々で注目されてきたこの世代は、因果な事には、社会の第一線からの去り際や去った後の生活まで脚光を浴び続けている。その理由は一言で言うなら、彼らがあまりにも多数だからである。

他の世代に比べて、多数であるがゆえに世間の耳目を引き続けた「団塊世代」のライフサイクルは、まだ現在進行形の事象なのだ。

このような現在進行形の人々の生に関わる事象、事件、その生活、その思想、その生き方、その思考、その行動の軌跡等々に、歴史学的視座と方法論をもってアプローチする事は可能かつ有効なのだろうか。

以前であれば、答は言うまでもなく否である。日本現代史研究の第一人者の一人、伊藤隆は、昭和三十年代の後半に昭和史研究を志した時、指導教官から「昭和期はまだ歴史研究の対象としては無理だから止めた方が良い」と言われたという（伊藤隆「近現代史史料の現在」[『本郷』No. 53, 2004. 9, 吉川弘文館]）。現在ですら、現代史、同時代史に懐疑を示す正統を以て任ずる歴史家は皆無ではない。

かつては、一つの事件、一つの事象、一人の人物が現在進行形である事、すなわち継続中、生存中である事は、それだけで十分に歴史研究の対象からは排除される事を意味していた。そして、その排除の論理には、それなりの妥当性もあった。

この排除の論理の要諦は、現在、生起している事象～すなわち、主体か客体かは別として、又、意識するかしないかにも関わらず、何らかのかたちで自らもその渦中に巻き込まれている事象～に関して、それを歴史学の対象として客観的に見据える事は不可能という事に尽きる。

**同時代史研究に伴う困難** 現在、生起している事象に関しては、当然、現時点でまだ生存中の人々の関与が考えられる。当該人物は死去していたとしても、その遺族等、少なからぬ関係者が生存している事が予測できよう。そのような場合、生存中の当該人物に不利益をもたらすような文書は秘匿されているケースが多い。

現在では、公文書の公開や一般的な情報公開も以前とは比較にならないくらいに進展している。しかし、それにしても原則として、国家や生存中の人物の不利益にならない範囲内等のたがはめられている。決して全面的な公開ではない。

まして当該人物が不利益を被る事が明白な内容の私文書ともなれば、少なくとも、その人物の生存中の公開は期待すべくもあるまい。個人情報保護法の施行も、同時代史研究には足枷（あしかせ）となりうる。

このように、まだ良質な文献資料は公開されていない可能性が高い環境下で、同時代史叙述を試みようとするなら、厳密な歴史研究に耐えうる程度の良い史資料を渉猟する労苦がついて回る事必定であろう。

一方、同時代においては、諸々のかたちで公表される大きな事件や事象に関する文書等々は、巷に溢れかえっている。そこには、事実を伝える記録や真摯に状況を見つめる叙述もあれば、興味本位のイエロージャーナリズム的叙述もあろう。大事件や耳目を引く事象に関与した人物に阿（おもね）るような誇張された叙述等も大いに出回るであろう。

そこには、歴史的事実を確定する事に資する良質な叙述もあれば、他方では必ずしも事実の一端をも正確に伝えてはいない叙述もある。こうして玉石混淆のうちに、一つの事件、一つの事象、一人の人物に関する諸々の資料は、膨大な量になって蓄積されていく。

このように、現在進行形の事件、事象、人物等に関しては、関係者や遺族の生存のゆえに重要な根本的史資料が未公開であろう事、その一方で玉石を含めて史資料が多すぎる事等を主因として、歴史的事実を確定しながら、その史実に基づく正確な同時代史を叙述する事は難しい

から止めておくべきという抑制が働いてきたのだ。

**同時代史は可能である** こうした抑制は、歴史学が、一級史料を原資として、その厳格なテキストクリティーク＝史料批判をもとに、共通認識としての史実を確定しながら、一つの歴史世界を構築する事をもって、そのレーゾンデートルとする学問であってみれば、当然の自己規制として首肯できる。

事実、そうした抑制は、歴史学徒間の共通理解として君臨し続け、戦前はおろか戦後においてすら、少なくとも五十年程度以前の出来事であれば、歴史学の対象とはなりえなかったのだ。

確かに、長い年月の経過とともに、同時代にあっては非公開だった重要な公私の文書が公開されていく事になろうし、夥しい量の資料も徐々に淘汰され、良質なもののみが残っていく事になろう。その時こそが、歴史研究の対象となる時という認識にも説得力がないわけではない。

しかし、今日では、最早、そんな悠長な事ばかりも言っていられなくなってきた。時の歩みが極端に早くなってきたからである。それこそ、ほんの昨日の出来事と思われた事柄でも、あっという間に過去の忘却の彼方に押しやられていってしまうような事態が常態化しているのだ。うっかりすると、5年、10年前の事でも正確に甦らせる事は難しい。

近現代の日本は、西歐化、資本主義化、工業化、情報化、IT化、国際化、グローバル化等々、生産のあり方、社会状況、国家間関係、その他、あらゆる分野において、常に〇〇化の状況下におかれてきた。

幕末維新时期以降の日本は、ひとつの安定した状態に留まる事を許されず（又は自ら許さず）、常なる変化を余儀なくされ（或いは自ら求め）てきたといえよう。

こうした状況の連続の下では、一つの時期から次の時期への移り変わりは早く、しかも時期と時期との間の連続性は希薄になり、その間の断絶は顕著となる。その断絶により、直近の過去の重大な出来事すら忘れ去られてしまいかね

ない。

そんな時代の進行、進展（決して進歩とは言えない）の早さに鑑みる時、直近の過去、ひいては現在進行中の事象に関する歴史学的研究の必要性・必然性が浮かび上がってくる。すなわち、同時代は歴史研究の対象にならないなどと、おつに澄ましているうちに、直近の過去の出来事が迷宮入りしてしまうなどという事態は防がなければならないのだ。

ここにこそ、現代史、同時代史のレーゾンデートルが見出せると言えよう。同時代史研究は、実は可能というよりも、必要不可欠なのだ。同時代史研究を蓄積していかないと、現在進行形の重大な出来事が、歴史の舞台に登場する事なく闇に葬られてしまう事にもなりかねないからである。

同時代史研究には、上のような困難が伴う事は否めない。しかし、それらを逆手にとって、古い時代の歴史研究では用い得ない方法を用いて、研究を深化させる事も出来るのだ。

まずは、生存者に対する聞き書き調査が出来る事は、同時代史の第一の特権といえよう。これは、他の時代史の研究では転んでも為し得ない技である。これをもとに文書史料だけを用いたのでは到底、構築し得ない生き生きとしたオーラル・ヒストリーを叙述することも可能である。

このオーラル・ヒストリーの手法は、歴史の浅い米国やカナダでは既に歴史学の研究手法として市民権を獲得している。日本でも御厨貴らが、可視性の高い政界の人物等に対して、この手法を以てアプローチし、政府・自民党における政策決定過程等々に肉迫しようとしている。そして、この手法は、政官財界の権力者の調査だけではなく、広く市井の人々の人生、思考、行動の軌跡等々を調査する際にも大いに効力を発揮する手法なのだ。

この手法を用いて歴史叙述を行う場合の一つの大きなネックとされる「インフォマントの記憶の不確かさ」や「自らに不利な事柄は述べない」といった欠点は、他の聞き書きや文書史料等でかなりの程度、補正することができる。

さらに同時代史研究においては、文化人類

学的な方法論であるパーティシパント・オブザベーション（長期参与観察）の手法なども援用できる。その他、統計処理等、現実諸科学的方法論をも用いることで、ともすれば平板になりがちな歴史叙述を構造的にふくらみのあるものにすることもできるのである。

以下、早速、聞き書き調査やパーティシパント・オブザベーションの成果を披露しながら、団塊世代を語っていくことにしよう。

## 2. 異世代の語る団塊世代

**団塊世代のイメージ** 私は、2005年秋から2006年夏にかけて、十代後半から八十代後半に至る（すなわち団塊世代の人々を含む）四百名弱の男女（無作為抽出とはいえないが）に対して、「団塊の世代に対してどのようなイメージを持っているか」、「その世代をどのような存在と考えているか」といった問いを中心にした聞き書き調査を行った。男女比は、ほぼ1：1である。

各年代別の人数は、十代後半約70名、二十代約100名、三十代約40名、四十代約50名、五十代約80名、六十代約30名、七十代約20名、八十代約10名。十代、二十代、八十代では女性の方がやや多く、三十代、四十代、五十代では男性の方がやや多い。

質問紙を配布して、それに記載してもらって後で回収するといった方法ではなく、殆どの場合、直接、面接するなかで、発問し、即答してもらった（ごく一部、メールで問いを發して、メールで返答してもらったケースもある）。

調査地は、私の日常的な行動半径内、すなわち東京都、神奈川県、静岡県、愛知県、岐阜県、京都府、大阪府の都市部が主である。したがって、回答者の殆どは大中都市在勤者であり、同都市およびその近郊のベッドタウン在住者である。メールで僅かに農山村部の声も聞いたとは言え、その農山村在住者も基本的には都市生活者に準じる存在なので、本調査では、純粋な農山村部の団塊世代に関する声は欠落していると言わざるを得ない。

しかし、マスメディアの発達した現代日本に

おいては、最早、諸々の「イメージ」に関して、都市部在住の人々と農山村部在住の人々との間に大きな懸隔はないと言えよう。とするなら、今回、農山村部の人々の声を多くは聞けなかった事はさほど本調査の欠点とはならないと考えられる。

インフォマントになって下さった方々は、一般企業のサラリーマンやOL、商社マン、銀行員、自営業者、小中高教員、大学教職員、弁護士、医師、建築士、会社経営者、文筆家、絵本作家、エッセイスト、工員、主婦、大学生、無職の年金生活者等々、多彩な職種に渡る老若男女である。

まずは、「団塊の世代とは」という問いに対する回答を概観しておこう。

世代を問わず、「他の世代に比べて、滅茶苦茶に人数が多い世代」、「良きに付け悪しきに付け、人数が多いために常にその言動が注目された存在」といった「多数であったこと」を直視する無難な返答が圧倒的に多い。

団塊ジュニア世代以下の若い世代では、概して団塊世代に対する関心は低い。「そんなに関心がないので、鮮明なイメージはない」、「何か威張ってる人たち」、「これからの金食い虫」、「よく分からない存在」、「殆ど無関係な人たち」等の回答が並ぶ。

文学的に一言、「うらぶれ中年」との評も。調査した中で一番若い層、現役の大学生の男女では、「団塊の世代といっても、はっきり、こんなイメージというのは浮かんでこない」、「自分たちとは殆ど関わりのない世代」、「あまり接点のない世代」等々の回答はまだ良い方で、「とても古い時代の人々」、「遠い過去の人」等々、縄文人や弥生人でもあるまいに、古い歴史的過去の存在（あるいは遺物！）として認識している向きすらあった。

このあたりは、十五年戦争と、白村江の戦い・元寇・秀吉の朝鮮出兵等とを歴史的過去として同列に見るような歴史観と同然であり、中等教育において、まだ近現代史が等閑視されている現状を物語って余りある事実のように思われる。

**団塊世代に敵対的な世代** 団塊世代と団塊

ジュニア世代の中間に位置する世代からは、団塊の世代を敵視するような回答や、その存在を厄介視するような回答が数多く得られた。

いわく「一言で言って、早くくたばってほしい存在」、「端的に言うなら目障りな存在」、「常に社会的に厄介だった存在」、「これから一層、社会全体のお荷物になる存在」等々、団塊の世代にたいする嫌悪感や敵愾心をむき出しにしたような回答が少なくなかった。

その背景には、個人的な事情も介在している。例えば、自分の上司であった団塊世代の人物が、自分の価値観を部下に押し付ける人だったとか、理不尽に怒鳴り散らす人だったとか、自分勝手な上に人使いが荒い人だったとか、である。

しかし、これら箸にも棒にもかからない上司の習性は、何も団塊世代の上司の特性とは限らない。どの世代にだって、こうした上司は見出すことができる。

偶々、団塊世代以下、団塊ジュニア世代以前あたりに位置する世代にとっては、直属の上司が団塊世代の人物であり、直接的な関わりも多かったために、個人的、個別的なレベルでの軋轢が多々生じ、その結果として、個人的に団塊の世代への反感を抱くことになったケースが多いのだ。

また、多数の団塊世代の存在のために、自らの昇進が遅れたといった怨嗟の声も聞こえてきた。ただ、これら小状況における個人的な事情による団塊世代の「個」に対する反感、怨嗟の声等は、大状況においてはそれほど大きな問題ではない。

問題は、「目障り」「厄介者」「お荷物」といった同様の表現ながら、「個」のレベルを超えた、「全体」としての団塊世代への反感が極めて強かったことである。これらは、世代間の反目、世代間の軋轢ひいては世代間戦争すら想起させるものであった。

先行するドイツの世代間問題のように先鋭化する可能性が大であるところが大問題といえよう。

こうした反団塊世代的な見解の背景には、マスコミの影響がある。殊に2005年頃からマスメディアがこぞって喧伝し始めた、「2007年以

降、団塊世代が順次定年を迎え、社会の第一線を退き、年金生活に入っていき事により、必然的にその生活を支える格好になる団塊以降の世代の負担は一層、重くなる」「団塊世代の定年に伴って、世代間格差は一層、拡がる」といった類の話に踊らされた～と言って言い過ぎなら、こうした類の話に同調した～見解と見ることができよう。「2007年問題」と称したマスコミの喧伝効果は絶大だったのである。

**団塊世代に好意的な世代** 逆に、団塊世代より上の世代の団塊世代に対する評価やイメージには、往々にして好意的なものが多かった。これは言うまでもなく、その世代は、数多い団塊世代の働きの恩恵に浴しているという意識に基づくものである。

団塊世代以前の世代は、ほぼ既に第一線を退き、年金生活者となっている。彼らは、戦後復興期、右肩上がりの高度経済成長期そしてバブル経済期の下で、実労働年代を送った。

彼らの背後からは常に多数の団塊世代がやってきて、大いに働き、大いに年金のための掛け金を納めたから、老後に困らないだけの年金を受給し、悠々自適の余生生活を享受している人々が多い。

そうした事実を背景にして、「ものすごく存在感のある世代」、「団塊の世代はよく働いた」、「彼らには『頑張り屋』というイメージを持っている」、「個性豊かな世代だったように思う」、「信頼できる仕事上のパートナー」、「人数が多く大変ななかで懸命に頑張っていた人たち」、「現在の日本の繁栄を築き上げた人々」、「日本の新しい方向を切り開いていった連中」等々といった好意的な評価、イメージが多く見られるのだ。

もちろん、その中であっても、「自己主張が強い」、「あまり協調的ではない」、「自信家が多い」等の、日本的文化空間の中にあっては、どちらかと言えばプラスとは受け取れない評価もなくはなかった。数少ないこうした評価は、団塊世代以前の世代の個人的体験によるものである。

すなわち、彼らの部下としての団塊世代の「個」が、上司としての彼らに必ずしも従順で



はなかったこと等に起因しているのだ。

こうした「個」の体験に基づく見解を除けば、団塊世代より上の世代の、「全体」としての団塊世代に対する評価やイメージは概して良好であった。

かいつまんで、各世代の「団塊世代」評やイメージを見てきた。これまでで欠落しているのは、団塊世代自身の自らの世代に対する評価やイメージそして団塊ジュニア世代のそれらである。前者は次節に譲るとして、ここでは後者に少々触れておこう。

**団塊世代を羨望する世代** 団塊ジュニア世代では、多少なりとも親たちを羨やましげに見ている傾向が見られる。この世代は、狭義には年間出生者数が200万人を越えた1971年から1974年までに生まれた人々を、より広義には年間出生者数が150万人を維持した1970年代に生まれた人々を指す。

1946年から1950年にかけて生まれた団塊世代の女性が20代半ばに達し、その多数が結婚し、出産した時期、やや遅れて同世代の男性が結婚し、父親となったのが丁度、この70年代だった。

団塊世代にあっては、「同棲」が流行り（「同棲時代」というマンガが支持され、それは由美かおる主演で映画化された）、「友だち夫婦」（すなわち学生時代の友だちから、そのまま結婚して夫婦になった男女）が流行った。

団塊以前の世代では、まだ「お見合い結婚」が多く、仲人を介する、このタイプの結婚では、男の方が3、4歳年上というのが夫婦のアイドル・タイプとされていた。

しかし、団塊の世代に至って、「恋愛結婚」の方が多くなり、それに伴って夫婦の年齢差も僅少化していった。こうして、一層、一時期に結婚、出産が集中、第二次ベビーブームが到来、団塊ジュニア世代の出現となったのである。

この世代の人々にとって、団塊世代の人々は親の世代ということになる。そうしてみれば、彼らの団塊世代に対する評価も甘くなるのは当然と言えるかもしれない。少なからぬ彼らが、親の世代を眩しい目で見ているのだ。羨望の眼差しとも言えよう。

ちなみに、団塊ジュニア世代の頃から、後にニート、フリーター、パラサイト・シングル等と称されるようになる若者群が出来（しゅったい）し始めた。

これに関しても、「そうした甘ったれた若者たちが出現するようになったのは、団塊世代の子育てが間違っていたからだ」、「団塊世代が人の子の親としてなっていなかったから、ああいふ困った若者たちが量産されることになった」といった団塊および団塊ジュニア両世代に対する偏見に充ち満ちた見解を發する他世代の人たちも決して少なくはない。

**個別的な団塊世代論（1）** 以上、各世代（団塊世代を除く）の団塊世代に対するイメージ、見方を概観した。続いては、各世代（同上）の個別的な団塊世代観を少し見ておこう。

まずは男女現役大学生の見解から。

• A大学生（女、19歳）・・・団塊世代の大勢の人たちが仕事を辞めたら、こちらに就職のチャンスが回ってくるからラッキー！その人たちに抱く気持ちはそれだけ。どうこういうイメージなんか持ってない。いつまでも仕事にへばりついててもらいたくない。「早くひっこめー」って感じかな。

• B大学生（女、22歳）・・・団塊世代が定年を迎えるという事は、その人たちが働かなくなり、生活するお金にも困り、他人に頼るようになる事を意味します。だから、既に大問題になっている年金問題がより深刻化し、大きな混乱が起きる事が予測されます。ただし、私は、これまで汗水垂らして働いてきた人たちに対して、国家がきちんと年金を給するのは当然だと思うし、若い私たちが、団塊世代の人たちを年金泥棒みたいにいるのは間違っていると思います。

• C大学生（男、20歳）・・・僕らの団塊世代に対する関心といえば、その人たちの退職に伴って発生する年金問題と労働力不足と労働の質の低下と彼らのその後の人生ですかね。ただ年金問題は、彼らの問題ではなく、国家の政策の無策ゆえの問題です。これをあたかも彼らの責任のように取り沙汰する向きもありますが、これはお門違いの議論ですよ。

労働力不足の問題等もグローバルな視点で見

ていくべきマクロな問題で、団塊世代の退職といった矮小な視点だけで解決できる問題とは思えません。

・D大学生（男、21歳）・・・団塊世代の定年退職によって、各企業等の熟練労働力不足が深刻化するでしょう。この時、各企業が、どのような対応をして、その危機を乗り切るのか、或いは単に企業規模を縮小することで生き延びようとするのか、そのあたりの各企業の動向に関心があります。日本経済の根幹が揺らぐというような事態にはならないのではないのでしょうか。

**個別的な団塊世代論（2）** 続いて、働く若い世代（段階ジュニア世代を含む）の见解を見よう。

・Eフリーター（女、23歳）・・・団塊世代の人たちって結構、働き者で、各方面の専門家になってる人が多いでしょ。だから、そういう人たちが一斉に定年退職していってしまうと、様々な職場が私たちみたいな、そんなに働き者じゃない素人ばかりになるんじゃないかって心配になっちゃう。

・F歯科技工士（女、25歳）・・・団塊世代のイメージは、常に辛い思いをしながら、今の日本を立ち上げた人たちという事に尽きますね。これから退職していくのに、あんまりいじめちゃ可哀想。

・G銀行員（男、34歳）・・・働き蜂の大先輩って感じですかね。これからその世代の人たちの懐は、僕らの狙いどころですよ。退職後のその人たちの金がどういう風に動くのかには大に関心がありますね。

・Hフリーター（男、27歳）・・・すげえ数のその人たちを俺らが養っていくのかと思うと「やめてくれ～冗談じゃねえ～」って感じ。なんで、俺らが犠牲になんなきゃなんねえの？早くくたばって欲しいよな。

・Iマスコミ関係者（男、24歳）・・・国家や各個人が、老いていく団塊世代にどのように対応していくのか？この対応の仕方は、これからの日本のあり方を占う試金石になると思いますよ。

・J高校教師（女、32歳）・・・私の父母もちょ

うど団塊世代の人間です。だからかもしれないけど、その世代は結構、ひいき目に見ちゃいますよね。両親をみてても、二人とも教師なんですけど、物事を本質に遡って考えようとするし、生徒思いだし、尊敬しちゃってます。

いまでも二人で教育論なんか戦わせたりしてるし、気が若いんですよ。教師やってく上で両親は鑑です。そんなわけで、団塊世代って、目映いような、羨ましい世代ですよ、私にとっては。

・K出版社員（男、26歳）・・・戦後のベビーブームによって生まれてきた人たちが団塊の世代の構成員でしょ。数が多くて大変。いつも過当競争に晒されていたお気の毒な世代ですよ。昨今では退職金とか年金とかで、いわれなき中傷は受けるし、とにかく「お気の毒世代」って感じがしますね。

・Lツアーコンダクター（女、30歳）・・・高度成長の時代を、家族より仕事第一でがむしゃらに頑張っていた今のオヤジというところでしょうか。生活の豊かさで日本の成長を目差し、未来を信じて頑張ってきたウブな人たちって感じもしますね。

**個別的な団塊世代論（3）** 団塊世代と団塊ジュニア世代の中間に位置する世代の见解は、先に触れたように概して極めて辛辣である。

・M医師（男、44歳）・・・高度経済成長は、団塊世代のお蔭という話をよく聞きますが私はそうは思いません。時期的に見て、日本の高度成長期に中核的存在として、それを実質的に支えたのは団塊世代の前の世代の人びとですよ（筆者注＝筆者もこの点に関してはM医師の见解に同意する）。

団塊世代の人たちは、その高度成長に乗り遅れまいとしてしゃかりきに働いたに過ぎない。余り自分というものはっきり持っていないんじゃないのかなあ。時流に阿（おもね）るようなところもあって「卑しさ」を感じます。そのくせ反体制ぶったり、妙に斜に構えてるポーズを取ってみたり、なんか卑しいよなあ。好きになれませんね、団塊は。

・N製造業サラリーマン（男、49歳）・・・ちょうど上司が団塊世代のヤツなんだけどさあ、全くゲジゲジ野郎のイヤなヤツなんだよ。信じが

たい神経の持ち主でさあ、仕事はそこそこ出来ただけどさあ、威張り散らすばっか。あの野郎の辞書には「部下思い」っちゅう言葉がないんだよ。で、おまけに、シャレは分かんねえし、ケチだしさあ。飲みに行っても必ず割り勘だし、もう行きたくなえ〜っちゅうハイ！って感じよ。

団塊は数が多くって、いつもワリ食ってきたから、さもしいなかなあ。まあ、俺の上司だけ見て、団塊世代はどーこーっちゅうのも偏狭な見方な事は分かってるけど、ごく身近かにいる団塊がそいつなんだから、しょうがねえよなあ。まあ、俺の独断と偏見と思って聞いて。聞いて。

・Oソーシャルワーカー（女、40歳）・・・団塊の世代は、時代の波に乗って、深く考える必要もなく生きてこられた世代だと思います。時代背景上、自分探しに時間を費やす事を許されず、とにかくただ頑張って働き、走り続けてきた人たちではないでしょうか。

ですから、これから、仕事をリタイアした後、自分と正面から向き合って、生き方を探られるのでしょうか、これまでがこれまでだけに、その作業は難航するのではないかと思います。

リタイア後、ただ何となく時間が過ぎていく生き方に埋没するのは辛いでしょうし、かといって仕事を失った喪失感を補う何かを持ち合わせているその世代の方って、そう多くはないでしょうから、これからが大変でしょうね。

・P自営業（男、42歳）・・・競い合いの中で頑張ってきた哀れな世代。競争的集団主義の権化。日本経済のために生け贄にされ、働き盛りの頃は、ただ「使われた世代」。定年退職の頃には、退職金が減り、年金も減り、それでいて自分たちより若い世代から、嫌がられ、迷惑がられる哀れな世代。哀れな末路を辿る因果な世代ですね。

・Q大学教員（男、47歳）・・・まずは、ネガティブなイメージが強いです。年齢的には、そんなに離れてない世代だけど、心理的距離は離れますね。高度成長の後半部分を担って日本の経済発展に貢献してきたのは事実でしょうけど、後の世代からは、その存在は軽視されている感じ。人口が多くって可哀想だなと同情しちゃい

ますね。老後は寂しそう、侘びしそう、・・・痛々しい感じすらします。

**個別的な団塊世代論（４）** 最後に団塊世代より上の各世代の見解を見ておこう。

・R無職（男、79歳）・・・結構、やる気もあって、実行力もあり、日本の発展に大いに貢献した世代だと思いますよ。その世代が人数が多かったから、その人たちの働きで私たちの年金がまかなわれていることには感謝せざるをえませんですなあ。

・S無職（女、80歳）・・・一つの目標に向かって頑張った世代じゃないでしょうか。だから、一本、筋が通っていますよね、団塊の世代の人たちって。強気で負けん気が旺盛な人が多いように思いますけど、それでいて協調精神もあって、思いやりもあるし・・・いい人たちが多いんじゃないでしょうか。

・T書道師範（女、78歳）・・・団塊世代って、長らく第一線で働いていて、ここへきて、どっと退職される方々の事ですよ。この世代の人たちがいたからこそ、今の日本があるような気がしております。ですから、その世代の方々には感謝しこそすれ、批判なんかはととても出来ませんわ。

でも、どうも新聞なんかを見てますと、団塊の世代って言いますと、退職金や年金の問題などで叩かれているようでお気の毒ですわ。悪いイメージを持たれてしまっているみたいですけど、この世代の方々が活躍して下さっていた頃を忘れず、感謝しなければいけないって思っておりますのよ。

・U大学非常勤講師（男、66歳）・・・団塊世代の一斉退職の始まりは、日本の高齢社会が一層、本格化する事を意味します。団塊世代は、私たちの世代のすぐ後の世代ですが、例えば我々の世代では、大学を出て、大学院に入って、大学にポストを得る事も容易だったと言っただけですが、彼らに比べれば・・・。団塊世代は、大学入試も大変なら、就職も大変、大学院に入るのも大変、大学にポストを得るのも大変でしたし、これから大変な「大変な世代」って感じがしますね。個人的には、その世代には結構、好感情、好印象を持っていますけどね。

・V自営業（女、68歳）・・・団塊世代の方々が、全体として頑張ってくれたので、今日の日本があり、私たちの豊かな生活があるのだと思いますよ。団塊の人たちって、現代日本の申し子のような、生みの親のような・・・そんな気がしますね。ともかく強い世代だったような気がします。

・W建築士（男、64歳）・・・自分を固守するタイプが多いと思うなあ。数が多い中で競争に打ち勝ち、自分を守り、自分を確立しなければならなかったんだから、無理ないよなあ。でも、それだけに、ツボにはまると、凄いエネルギーで頑張る連中だったよ。

**各世代の団塊世代観を総括すると** 先に述べたように、各々の世代によって、団塊世代に対する見方はかなり異なっている。しかし、同一の各世代内で見ると、具体的、個人的な視点からであれ、抽象的、観念的な視点からであれ、各世代の人々が自らとの接点を探るなかで抽出した団塊世代観には奇しくも共通項が見出せる。類型化が可能といえよう。

再確認しておこう。以上、述べてきたのは、代表的、典型的な各世代の団塊世代観である。10～20代の、団塊世代に対する無関心と、関心がある場合でも年金問題、格差等との絡み合わせでの関心が殆どという現実。団塊ジュニア世代の、団塊世代への郷愁にも似た憧憬の念。団塊と団塊ジュニアの間に挟まった世代の、かなり強硬な反団塊世代意識。団塊世代よりも上の世代の、団塊世代に対する評価の高さ、好意的な態度。

もちろん個々の見解をとってみれば、例外もある。しかし、最大公約数的な他の各「世代」の団塊「世代」観は、それぞれほぼ上の通りと言う事ができよう。

では続いて、団塊世代自身の自画像を見ていこう。

### 3. 同世代の語る団塊世代

**団塊世代が語る団塊世代** 団塊世代の人たちに聞き書き調査をしていて、もっとも多く異口同音に発された言葉の一つは次のような文言

だった。

「異世代の人たちは、団塊の世代はその人生のすべての行程で頑張ってきたというような事を、よく言うけれど、自分たちはそんなに頑張らばかりきたわけじゃない」。「よく高度経済成長の担い手として、モーレツ社員を演じてきた世代とか言われるが、それは我々よりも少し上の世代だ」。

団塊世代の人たちの自己イメージは多種多様なのだが、右のような認識では、ほぼ一致していた。どうやら彼らは、「頑張りの権化」「高度成長の牽引車」視される事を極度に嫌っているかのようであった。

前節のM医師の発言のところでも注記したように、私も、団塊世代は高度成長の中核を担った存在とは言い難いし、必ずしもその人生の舞台上で常に頑張らばかりいたとも言えないと考えている。

高度経済成長は、1973年（昭和48）の第一次オイル・ショックを契機として終息に向かうというのが共通認識といえよう。その当時の団塊世代は、ほぼ二十代半ば。大卒なら、まだ勤めて数年、中卒で「金の卵」と称され、集団就職列車で郷里から大都市に向かった人々でさえ、勤めて十年前後の時期である。

そんな彼らを、高度成長の中核的存在と言う事はできまい。あえて言うなら、三十万人弱の中卒「金の卵」団塊が、高度成長を底辺で支えていたというのが正鵠を射た表現といえよう。

もう一つ、これも彼らにあって、かなり共通して見受けられた見解は、「団塊、団塊と一括りにして評価してもらいたくない。我々は同世代ではあっても、それぞれに個性的な人間なんだし、別に団塊世代といっても特別の連帯感のようなものがあるわけでもない」というものだった。

けだし当然の見方といえよう。殊に前者に関しては、私もほぼ同様の認識を持っている。ただ、後者に関しては、その通りではあるが、そう言い切ってしまうと「世代論」そのものが成り立たない事になってしまう。

であるから、ここでは、プロローグでも触れたように、同じ時代の空気を吸い、同様の事象

をかいま見、同じ事件を直接、間接に見聞き、同じ状況の中で育ち、教育を受け、社会生活を送った人たちとして、諸々の共通項を持ち合わせている同世代の人々ということで、団塊世代の人々のみならず個々の各世代の人々を同一世代として語る事は可能～すなわち「世代論」は一定限の有効性を有する～という事を再確認しておこう。

**団塊世代の自画像（１） 創造的な職業の団塊男性たちの自画像は・・・**

・A 絵本作家（男、1948年生）・・・僕たちのセンスとして、いつも僕らが新しい時代を切り開くんだってという気概を持つとったがや。学生運動にしたって、僕ら以前には、顕在的には、殆ど民青（民主青年同盟＝日本共産党系の学生・青年組織・・・筆者注）しかあれせんかったでよ。僕らの時に全共闘が結成されたんだぎゃあ。少なくとも「ノンポリ」では恥ずかしいって意識は、当時の学生には浸透してたで。最も卒業して、会社に入ると、ころっと転向する奴らもおったけどな。資本主義粉碎って言っとったのが、会社の広告マンになってまったりでよ。

6、70年代のポップアートも僕らが引っ張っていったでね。各方面のデザイナーやらイラストレーターやら、その他の美術の分野でも、我こそは時代のパイオニアっちゅう気持ちでやっとなる連中が多かったぎゃあ。

団塊世代だっちゅうことでの連帯感なんかあれせんて。むしろ「塊やない、個だ！」っちゅう意識が強烈なのが団塊世代の特徴だがや。

・B作家（男、1947年生）・・・路地で遊んだ経験を持つ、戦後生まれの最後の世代だね。放課後は、近所の子もたちと河原でチャンバラごっこってのが我々の幼い頃の原風景かなあ。そんな時には、ガキ大将が、それなりにみんなをまとめたよな。

二〇歳前くらいの近所のニイさんが、自転車の荷台に乗ってくれて、遠くまで連れてってくれたりした思い出持ってるのも我々世代までだよ。

長じては、学園紛争かなあ。大学と言えば、バリケード、ロックアウト、立て看板、アジ演説が原風景だもんね、我々にとっては。「ワレ

ワレは～」で始まる独特の演説口調とか大学当局に対する「ナンセ～ンス」って言う掛け声は、耳にこびりついてるよ。

団塊世代の特徴っていったら、ここらまでかな。この辺りで、団塊は終わってんじゃないのかなあ。切ないよな。後は、挫折とかいって、沈黙しちまったのが多いもんね。

**団塊世代の自画像（２） 比較的、自由な職種**の団塊男性たちの自画像は・・・

・C研究者（男、1948年生）・・・最初から体制に組み込まれて生きる事への違和感、最初から遮二無二、頑張る事への違和感を持っていた世代だよ。そういう意味での矜持は、団塊世代に共通するものじゃないかな。

俺自身、そんなに主体的に大学闘争、学生運動に取り組んだわけじゃないけど、権威・権力への反発心とか、エリートや金持ち、要するに保守政治家、官僚、資本家といった存在に対する反発心とかは旺盛だったね。

研究者の道を選んだのも、人付き合いが苦手という事もあったけど、今、言ったような気持ちから、少しでも独立的な職業で生きて行きたいって考えた結果でもあるんだよ。

・D弁護士（男、1949年生）・・・結局は、資本主義社会にどっぷり根を下ろして暮らしたるんやけどな、学生時代は、この俺かて、それなりに主体性をもって生きとったんやで。

やっぱし、なんというたかて、「造反有理 革命無罪」の世代やしなあ。1976年からの文化大革命かて、あんなもんやのうて、もう少し理想的な理想社会体现のための運動やと思うてたし・・・。

1987年の天安門事件までは、中国人民解放軍は決して人民に銃口を向けることはあらへんと信じとったもん。ちゃんと、毛沢東語録かて持っとったしなあ。

学生時代には、ノンセクト・ラディカルを気取っとったし、ベ平連のデモにも参加したし、これでも体制変革を夢見とったんやで。

弁護士になろかいなあ思うたのんも、かっこつけて言うたらやなあ、資本主義社会の中で、弱きを助け強きを挫くため、権力に媚びひんと生きてくためやっつたんやで。

現実は大分、違ごてしもてるけどな。けど、団塊の連中は、多かれ少なかれ反体制・反権力っちゅう意識は持つとる連中いうふうに規定できるんちゃうかいな。

**団塊世代の自画像（3）** 大学卒業後は、資本主義の最前線に立った団塊男性の自画像は・・・

・E元商社マン（男、1947年生）・・・団塊世代といえば、その人生で最も輝いてた花の時代は学生時代だろう。団塊世代イコール大学闘争世代って、言い切っていんじゃないかな。

闘争の担い手だったヤツにしても、担い手ぶってて、その実は日和ってたヤツにしても、真性のノンポリだったヤツにしても、権力の走狗だったヤツにしても、何かみんな、それぞれに考えて、悩んで、苦しんで、それでいて、どこか燃えてたからなあ。

理想を追い求めて、変革を、「造反有理」を叫んでたヤツに対しては、僕なんかはコンプレックスを感じてたね。青春のカタルシスって感じて言うような皮肉な見方じゃなくってだよ。彼らは真面目に状況を生きてるって感じだったもんな。

僕なんか、自己批判しなきゃいけないけど、ファッション的に情動的全共闘だったに過ぎなかった。岡林信康の「友よ、夜明け前の闇の中で、友よ、戦いの炎を燃やせ」なんてのを歌いながら、本物じゃない自分のひ弱さを感じてたんだ。

高石ともやの「受験生ブルース」とか、高田渡の「自衛隊へ入ろう」とかもよく歌ったよなあ。バンバンの歌ってた「いちご白書をもう一度」じゃないけど、「無精ひげと髪を伸ばして、学生集会へも時々、出かけた」けど、就職が決まって、髪をキチンと切りそろえ、スーツを着て、さっさと反体制から体制の側へと乗り移ったもんな。

当時、少し後ろめたい気がしたけど、それも僕に良心があるからこそと自己弁護的に、自分にいい風に解釈してたよ。でも団塊世代の連中の中には、そんな風な思いで学生時代から社会人への移行期を過ごした連中が多いと思うよ。

そして、結局、長らく企業社会にどっぷり浸かって生きてきたけど、ふっと我に返った時、

何か、自分の人生、ちょっと違ってたんじゃないかって疑問を感じてた頃、幸か不幸か、早期希望退職者募集があったので、これ幸いと企業社会からドロップアウトしたのさ。

そういう意味では、僕なんか典型的な団塊世代の人間と言えるかもしれない。僕の人生は、一般的、普遍的な団塊世代の人生と言えるかも知れないぞ。

**団塊世代の自画像（4）** 大学闘争の闘士から教育界に身を転じた団塊女性の自画像は・・・

・F高校教員（女、1949年生）・・・一言で言って、そうね、体制拒否の世代って言いたいわね。どこかで今も、大学闘争を色んなかたちで引きずってる子が多いもの。もっとも最初から体制ベッタリの子たちも多いから、一概にそんな風には言えない事は分かってるけど。

当時の女子学生で、私たちみたいに中高の教師になってる子たちって、体制に組み込まれたくないとか、職場環境に男女平等を求めるとか、生徒にとっての理想的な教育環境を創造していくとかいった主体的な思考をもって教員採用試験に挑戦した子たちが多いのよ。「でもしか先生」なんて、とんでもないのは一人もいないわ。

だから石原反動都政の下で、都教育委員会が卒業式での君が代を歌ったり、日の丸に敬意を表する事を教員に強制するのに対して、訴訟を起こしたり、一審勝訴を勝ち取ったりした原動力の一端を担ってるのも団塊世代の女なのよ。

むしろ、男の子の方が、軟弱で、体制に取り込まれてしまったりしてるのも多いわね。学生時代には、一丁前に全共闘の闘士面してた子が、卒業したら、「そんなの知らないよ。変な過去をほじくり出すのは止めてくれ」って感じて、遠ざかって行っちゃったもん。

私たちみたいな団塊世代の女は、体制変革の闘争に参加して、その中でも男性優位を見ちゃってるし、体制側だけじゃなくて、反体制側にも蔓延る（はびこる）男性中心社会に絶望して、ウィメンズ・リベレイション（日本でいうところのウーマン・リブすなわち女性解放[運動]・・・筆者注）にも接近した経緯もあるから、二重の意味で体制拒否の世代って言えるかも。

今でも、資本主義的搾取からの解放と男性の

抑圧からの解放を求めているようなところがあるわよ。そういう私たちの志向は、良きに付け悪しきに付け、間違いなく団塊世代が歩んだ時代状況の中で形成されてきたものだと思うわ。

**団塊世代の自画像（５）** 東大闘争の渦中にありながら、それからは距離を置き、ノンセクト・リベラルを自称し、後、大学人としてエリート街道を歩んだ団塊男性の自画像は・・・

・G大学理事（男、1947年生）・・・団塊世代のイメージという、どうしてもそこに自分を重ね合わせてしまいがちですが、なるべく一般的に考えます。まず、数が多い、学歴が高い、お金がある、元気がある世代と言えます。

我々が、行くところ、新しい価値観が作られていったという経緯からしても、団塊世代の数の力は、他のどの世代も侮れないのではないのでしょうか。

かと言って、我々は、数を頼むようなけちくさい世代ではないですね。個として、堂々と全体に立ち向かう主体性を持っているのが多いです。まだまだ社会の中心を担う力のある世代です。

若い世代が、団塊世代は数が多いから養うのが大変なんて言ってますが、とんでもない見違いです。条件さえ設定されれば、逆に若い世代を養ってやれますよ。お望みならばね。

我々の世代は、年取ったら史上最強の高齢世代になりますよ。並の老人扱いするなって言いたいですね。数が多くて大変、大変と言われながら、人生の試練をちゃんと乗り越えてきた世代ですから、精神的にも肉体的にも強靱です。

一般的に、高齢者が最終的に寝付いてから亡くなるまでの期間は、三ヶ月以内が70パーセント強です。一年以上寝付いて亡くなる人は8パーセント程度ですが、免疫力が強靱な我々の世代では、この数字はもっと下がるでしょう。

勿論、個々を見れば、弱々しいのも、主体性を欠落させたようなものもないことはないですが、全体的に見ると、極めて強い世代ですね。上の言うことなんか、まともに聞くものかというような反骨心の塊のような人が多いから、団塊って言うんじゃないでしょうかね。

**団塊世代の自画像（６）** 教育学者の道を歩

んだ団塊男性の自画像は・・・

・H大学教授（男、1948年生）・・・団塊世代は、期待された世代ですよ。我々、団塊世代の親たちって、みな例外なく戦前生まれで戦前の教育を受けた世代ですよ。

ですから、敗戦を契機にして、コロッと変わった社会の体制や価値観や教育のあり方等々に戸惑いながらも、それらをしなやかに受容した世代です。元々、大正期の自由主義的な教育や民本主義の影響を受けている人も少なくない世代ですからね。そんなところから、戦後民主主義の風潮が顕在化してくる中で、生を受けた我々に期待するところは大きかったわけですよ。

我々が教えを受けた小中高の先生たちだって、大正期の自由主義的な教育の申し子みたいな人たちが多かったし、彼らも戦前の暗黒時代の軍国教育のおぞましさを体験しているだけに、自分たちの受けた大正期の教育の良い面を我々に受け継がせたいという願望を持ってました。

そもそも大正デモクラシー下の自由主義的な教育の伝統があったからこそ、戦後民主主義下の教育がありえたのです。アメリカによる占領支配下のGHQ民生部の力だけで、戦後民主主義教育が出現したわけでは毛頭、ありませんからね。

戦後民主主義下で、次の時代の担い手として、親や教師たちの期待を一身に担ったのが団塊世代だったという事です。この団塊の世代を把握しようとしたら、その親の世代をきちんと知る事も必要でしょうね。

団塊世代の親の世代は、戦争の悲惨さを身を以て体験しているだけに、割合にリベラルな考えの人が多いですから、当然、団塊世代もその影響を受けていると思いますね。そういう素地があったからこそ、団塊世代は、大学闘争や市民運動なんかに参加できたんですよ。

**団塊世代の自画像（７）** 様々な立場の団塊女性たちの自画像は・・・

・Iパートタイマー（女、1949年生）・・・学歴社会の申し子。受験戦争の申し子。競争が激しかった時代の申し子。その前の世代ともその後の世代とも厳別できる、かなり特徴的な世代。

数が多いだけに、競争心が旺盛で、それだけに自分勝手、わがままな人が多い世代のように思える。自分自身、団塊世代だけど、あまりいい世代とは思ってない。

・J 美術館学芸員（女、1948年生）・・・団塊世代のイメージって言われたら、まず昭和30年代の「すし詰め教室」が思い浮かびます。戦争に負けて、兵士が内地に帰還して、それまでいびつなかたちで処理されてた性欲が、夫婦という男女のもとに戻ってきて、その結果、大量の子どもが生産されたわけでしょ。その御陰で私たちは「すし詰め教室」、常に過当競争・・・。あんまり有り難くないわね。

数が多い分、分け前も少なくなるし、負け犬も多くなるし、ろくでもない世代だわ。

・K 元工員（女、1947年生）・・・団塊世代のイメージ言われたかて、そんなんピンとはこうへんわ。何やしらん、団塊世代言うたら、インテリみたいに思われてるみたいやけど、私ら中卒で下積み生活してきた人間やろ。そんなん関係ないし。「金の卵」やら言われて、もてはやされて、こき使われただけやんか。なんもおもしろいことあらへん。真面目に生きてきただけやわ。

・L 専業主婦（女、1947年生）・・・Kさんと同じやわ。団塊の世代言うて、世間の人が思うたはるのんは、大卒のサラリーマンとちゃうやろか（違うだろうか・・・筆者注）。そんな人ら、私らとは無縁の人やわ。私ら、うちの人も私も中卒で、汗水垂らして働きまくってただけやしなあ。

年代的には確かに団塊の世代に属するんやろけど、そんな実感てんであらへんわ。これからの団塊世代の老後はバラ色やら、エライ人らがよう言うたはるけど、ほんまやろか。バラ色の老後やら黄金の老後なんて、私らとは関係ない感じやわ。

・M 福祉施設管理者（女、1949年生）・・・団塊世代のイメージと言えば、ニューレフト、大学闘争、ウーマン・リブ、フリーセックスですかね。

でも、ニューレフトとしては、労働現場を知らなかったという限界、やってはいけない事は

しないという事を認識しえなかったという限界等、限界がいっぱいあったのが団塊世代のニューレフトです。

フリーセックスに関しては、これをうまく男に利用されて「結婚まで純潔を守る、処女でいるなんて、体制に取り込まれた旧態依然たる遅れた女」と喧伝されて、バリケードの中で男と性的交渉を持ち、妊娠してしまって中絶した団塊世代の女も多かったんですよ。

だからこそ榎美沙子の「中ピ連」なんかも、一定の支持を受けたんじゃないでしょうか。

#### 4. 団塊世代とは何だったのか

##### 団塊世代とは、どういう世代なのか（1）

以上、かなり詳しく、包括的な各世代の団塊世代観および個々の団塊世代論、そして団塊世代の自画像を見てきた。

既に、認識されたように団塊世代に関する見方やイメージは、団塊世代以外の各世代毎にかなり類型化できる。そして、各世代が、それぞれに団塊世代とどのように向き合っているかといえ、一にかかって団塊世代との経済的関わりをベースにしている事が判明した。

歴史が変わる原動力は経済である事、歴史転回の基礎は下部構造にある事等々は、このようなところにも明確に貫徹、発現しているといえよう。

繰り返しの煩は避けるが、畢竟、社会の中核として働く団塊世代から経済的な恩恵を被ってきた世代は、団塊世代に好意的見解、イメージを持っているのに対して、社会から退場していく団塊世代の存在が、自らの経済的安定や豊かさを脅かすという認識を持っている世代は、団塊世代に悪意とまでは言わないまでも、極めて好意的ではない見解、負のイメージを持っているのである。

しかも、いずれの場合も、団塊世代の数の多さが決定的に関与している。この数の多さゆえに、重宝がられたり、厄介視されたりする因果な世代、これが団塊世代なのである。

団塊世代を考える際のキーワードの第一は、「数の多さ」、「多数である事」に尽きると言え



よう。

### 団塊世代とは、どういう世代なのか（2）

自己のイメージと重なるのだから、当然と言えば当然だが、当の団塊世代の自らの世代に関する見解、イメージは拡散的である。

大学闘争世代、全共闘世代といったイメージを前面に持ちだしてくる向きも少なくなかった。それは、それとして事実の一端ではあろう。

それと関連して、主体性、自己批判、反体制、造反有理、ニューレフト、ウーマン・リブ等々も、同世代の人々の口をついて、よくでてくる語彙だった。

これらの語彙が、この世代にとってはよく馴染んだ語彙で、他世代には馴染みの薄い語彙であるとするなら、それこそ、どれだけ主体的に大学闘争に関わったか、反体制的な運動に関わったかは別として、これらの語彙もやはり、団塊世代を語る場合には避けて通れないキーワードという事になる。

「怒りの世代」というのも団塊世代を語る際によく出てくる語彙だ。これは、大学闘争に限らず、諸々のかたちで現体制を批判し、その変革を志向した人々が多かった事に由来する。

初期のカレッジ・フォークも体制批判、現状打破を歌っていた。歌で「怒り」をぶつけ、世間にアピールした。その代表格が岡林信康であり、高石ともやであり、高田渡だった。

大学闘争は、1969年、東大の安田講堂陥落を象徴的な契機として、やがて1970年代に入り、徐々に圧倒的な体制側の力の前に終息に向かう。

その後、闘争に敗れ、疲れ、挫折した人々は、かぐや姫の「神田川」「妹よ」等に象徴されるような「優しさの世代」へと志向していった。

こうした脈絡から、団塊世代は、「怒りの世代」でもあり、「優しさの世代」とも言え、これらも又、団塊世代を語るうえでのキーワードとなる。

ただし、こうした団塊世代を語る際のキーワードは、大学生活を経験した団塊世代にのみ通用するものに過ぎないのかも知れない。

### 団塊世代とは、どういう世代なのか（3）

いみじくも、前節の「団塊世代の自画像（7）」

で、KさんやLさんが述べているように、巷間に流布している一般的な団塊世代のイメージは、団塊世代のうちの一部に過ぎない、ある程度のインテリ、大卒のサラリーマンというかたちには集約されていると言えよう。

そこからは、多くの中卒の団塊世代男女等が排除されていたのだ。これは、これまでの団塊世代論においても欠落していた部分であった。

先に指摘した「数の多さ」、「多数である事」は、確かに団塊世代の一大特徴であり、それゆえに常に世間の注目を浴びてきたのであるから、団塊世代を語る際のキーワードの一としなければならない事は紛れもない事実だが、その多数の内容の分析が成されないままに「数の多さ」「多数である事」が一人歩きしていた恨みなしとしない。

であるからこそ、KさんやLさんのような指摘は極めて貴重と言えよう。

とはいえ、私は、やはり団塊世代を特徴付けようとする場合の主潮流の一つを、以下のような存在として規定しておきたい。これまた、KさんやLさんには、厳しく批判されるかも知れないけれども。

それは、＜大学闘争と微弱ではあっても何らかの関わりを持ちながら～たとえ、それがノンポリというかたちであったとしても～、卒業後は、何事もなかったかのように企業社会に取り込まれ、結構、真面目に懸命に働き、中間管理職になり、ある程度、経済的な豊かさも享受し、しかし、どこかで屈折した意識も持ち合わせながら、定年を迎え、老境に入っていこうとしている、多数であるがゆえに集団として可視性の高い人々の一群＞といった存在である。

私は、こうした存在を団塊世代のアイデアル・タイプとして提起した上で、以下の叙述に筆を進めようと思う。そこではKさんやLさんのような存在は捨象される。

その事への弁解の意味も込めて、多種多様な団塊世代の一員として、彼女たちにも登場してもらったのだ。

しかも、以下の叙述における彼女らの存在の捨象は、団塊世代論を語る上での支障とはならない。なぜなら、KさんやLさんらのような存

在は、彼女たち自らも述べているように、決してアイダル・タイプ＝理想型としての団塊世代ではないからである。

敢えて言うなら、彼女たちは、私がアイダル・タイプの団塊世代として提起した存在より、ずっと堅実な、地に足を付けた一般的、普遍的な生活者と言えよう。

一般的、普遍的存在をもって、個別的、特殊な世代を語る事はできないのだ。

## 〔2〕 団塊世代の時代背景（1）

### 1. 敗戦・復員あるいは団塊世代出生の頃

**敗戦そして引き揚げ** 1945年（昭和20）8月15日。この日は、紛れもなく日本人民にとっては期を画する日であった。この日は、敗戦、無条件降伏というかたちのゆえではあったが、日本人民が、十五年に及ぶ戦争状態からようやく解放された日だった。その前日、日本はポツダム宣言の全面受諾を決定したのだった。

暗い長い戦争の日々、人々は、大東亜共栄圏建設という美名のもと、巨大な帝国を構築し、東洋の盟主たらんと欲する軍部、軍国主義政治家に駆り出され、それぞれが様々なかたちで直接間接に侵略戦争に加担させられていた。

朝鮮半島全域を植民地化し、中国東北部に傀儡国家「満州国」を作り、東南アジア諸国を侵略し、多大な損害を与えた果てに、アメリカ合衆国を中心とした連合国側に完膚無きまでに徹底的に叩きのめされ、それでも国体護持のために降伏を決断できず、ついには地上戦を余儀なくされ、沖縄の人々を犠牲にし、さらには本土空襲で各都市は焦土と化し、多数の非戦闘員老若男女を犠牲にし、その総決算のような8月6日の広島、同9日のソ連の対日参戦、長崎への原爆投下という最悪の事態の招来を受けて、やっと軍国日本は降伏を決意したのだった。

戦争開始自体が無謀であったことは自明だが、軍国日本の指導者たちは戦争を終わらせる事に関しても無為無策だった。

他国を踏みにじった挙げ句とはいえ、自国民にも多大な犠牲者を出した挙げ句とはいえ、そ

して外在的な力によってとはいえ、こうした無謀・無為無策な国家権力が倒壊したのが8月15日だった。

一部の極端な軍国主義者、皇国主義者、右翼の人々を除けば、多くの人々の間には虚脱感と共に奇妙な安堵感が漂い始めていた。

そうした中で、敗戦ともなれば、当然、当時六百万人強といわれた海外にいた軍関係者、官吏、民間人等が内地に引き揚げてくる。1945年の秋が始まる頃から、その人口大移動は始まった。

例えば、10月18日、博多港に入港した朝鮮からの引き揚げ船には、甲板から船倉から船中の隅から隅まで全ての場所は立錐の余地もないほどの引き揚げ者で満杯だった。各地からの引き揚げ船然り、内地の各地方へ向かう復員列車また然りだった。

「戦争を知らない子どもたち」でも、引き揚げに伴う苦難は、藤原ていの名著『流れる星は生きている』等から、その一端を窺い知る事が出来る。

私の伯母も、奉天に駐留していた陸軍少佐の夫がシベリアに移送、抑留されていく中を、必死の覚悟で丸坊主になり襤褸（ぼろ）をまとって、生後3ヶ月の赤子を背負って、満州から朝鮮半島経由で、日本に戻ってきた。その間に、朝鮮の霊峰白頭山麓で、彼女は生まれたばかりの愛児の死を体験しなければならなかった。

何とか無事、日本に戻ったその伯母は、やがて2年余の長きに渡るシベリア抑留を経て帰国した伯父との間に、それこそベビーブームの申し子、団塊世代の子を授かった。

**米軍による日本の占領統治と文化人類学者ルース・ベネディクト** アメリカ合衆国及び米軍は、日本の敗色が濃くなってきた頃から、日本の降伏後の占領統治について考えを巡らし始めていた。

大日本帝国陸海軍という、米軍がかつて戦ったどこの国の軍隊とも異なる行動パターンをとる軍隊は、米軍にとって不気味な存在だった。「ゴー フォー ブロック」然り、「バンザイ アタック」然り。「シュイサイド・プレーン」然り。行動パターンが読めなかったからである。

プラクティカルにして、プラグマティックな思考の米軍は、そこで文化人類学者に日本文化の型や日本人の行動様式の研究を依頼する。白羽の矢が当たったのがフランツ・ボアズ麾下の俊秀、ルース・ベネディクトだった。

戦争さなかのこととて、文化人類学研究にとっては必須の現地（この場合、日本）でのフィールド・ワークが出来ない。やむを得ず、ベネディクトは米国内に住む日系人や日本軍の捕虜を対象として日本研究に取り組んだのだった。

その成果が、日本論、日本人論の嚆矢の名をほしいままにする、かの不朽の名著『菊と刀～日本文化の型～』として結実する。

日本社会の民主化や戦争責任との関連で、一時は廃止が現実のものとなりそうになった天皇制が存続することになったり、GHQの直接統治ではなく、その傘下に傀儡的な日本政府を置き、GHQの指令を忠実に実行させる間接統治のようなかたちが採られることになった背景には、このベネディクトの研究の成果が反映しているものと思われる。

#### マッカーサーと天皇のツーショット写真

かのあまりにも有名な9月27日、米国大使館におけるダグラス・マッカーサー元帥と昭和天皇とのツーショット写真も、ベネディクトの日本研究の成果の反映ではないかと私は考えている。

偶然にしては、あまりにも戦勝国アメリカ合衆国と敗戦国日本の立場の違い、力関係がシンボリックに巧妙に写し出されているからだ。

皇国主義教育のもと、天皇への忠誠、服従を頭に徹底的にたたき込まれていた戦前・戦中の日本人に対して、天皇を廃してカオスの状態に追い込んだり、反発されたりするくらいなら、その天皇の権威を占領統治に利用しようということで、直立不動の現人神たる天皇の横に傲岸な態度のマッカーサーを配して撮ったツーショット写真は、まさにマッカーサーを天皇の上位の神とする、彼の神格化のセレモニーの記念写真だったといえよう。

少なくとも、多くの日本人に、これから自分たちを実効的に支配する、天皇より上位に存在

する人物を顕在化させる効果は絶大な写真だった。

その効果たるや、一ヶ月前の8月30日、勝者の余裕を漂わせながら「アイ シャル リターン」を現実のものとしたマッカーサーが、悠然と厚木飛行場に降り立った時の写真の比ではなかった。

個人であれ、国家であれ、「各々、ソノ所ヲ得」ることによって社会の、はたまた国際社会の安寧秩序が保てると考える日本人（ベネディクト『菊と刀』）であってみれば、日本においてマッカーサーに所を得さしめる（天皇の上位の置く）事は、日本人にマッカーサーの威令に服従させることを容易にする効果的な占領統治の手法だったといえよう。

米軍による日本の占領統治が、日本人との関係において比較的良好に推移した（あくまでイラク戦争後の米軍等によるイラク占領統治などと比較すればという事に過ぎないが）とするなら、ベネディクトの研究はなにがしか、その事実貢献していると言わざるをえまい。

しかし、日本の民主化を標榜しながら、その実、占領統治において、旧体制を利用し、その上に乗って統治を進めた事は、取りも直さず民主化が極めて中途半端なところで終わってしまった事を意味する。

とするなら、アメリカ合衆国及び米軍が、日本文化、日本人の民族性をかなり理解しながら、占領統治を実施したことは、日本の本質的な民主化にとってはマイナス要因となったと言えよう。

**食糧難の中のベビーブーム** こうした、敗戦、他国による占領統治という未曾有の体験の中で、戦中には鬼畜米英と罵っていた旧敵国側に擦り寄り、自らの権力・財力を温存する事を画策し、そのために狂奔していた支配層の人々とは異なり、その日その日、口を糊する食料にも事欠いた人々は、生きるために日々、必死の思いでやりくりしていかなければならなかった。

焼け跡にヤミ市が雨後の竹の子のごとく立ち始め、満員の買い出し列車が運行されるようになる。

謹厳実直で鳴らした私の祖父などは、「ヤミ

市のような非合法的な所で食料を調達するような情けない真似はしてはいけないよ」と祖母に厳命した。困った祖母は、祖父に内緒で、こっそり、京都中にも林立していたヤミ市の一つ、出町橋西詰の大ヤミ市場で白米、さつまいも、じゃがいも等を買って、何とか家族の飢えをしのいだと述懐している（この辺り詳しくは拙著『ある「大正」の精神』[1982、吉川弘文館]を参照されたい）。

この頃、ちょうど結婚適齢期、出産適齢期を迎えていた私の母なども、娘時代に両親から買ってもらって大切にしていた着物等々を持つては農家を訪れ、僅かな米や野菜と交換してもらったという。

ヤミ市で食料を調達するのも彼女の役割だった。そうでもしなければ、やがて家族揃って栄養失調そして餓死ということになりかねなかったからである。

現に、法の番人が自ら法を犯すようなことは出来ないとして、清廉にも配給食料だけの生活を貫いていた東京地裁の山口良忠裁判官は、遂に餓死的な死を遂げている。それは、1947年（昭和22）、団塊の世代が続々と生まれている頃に起きた悲劇だった。

その前年1946年（昭和21）5月19日には、なけなしの主食すら遅配に次ぐ遅配、時には欠配という事態を受け、東京では、二十数万人の参加をえて、「米よこせ」運動の集大成的な食糧デモ＝食糧メーデーが繰り広げられていた。

1947年（昭和22）10月には、改正刑法公布により廃されることになる不敬罪が忽然と登場したきっかけとして有名なプラカード事件の発端、「詔書 国体はゴジされたぞ 朕はタラフク食ってるぞ ナンジ人民飢えて死ぬ ギョメイギョジ」と記されたプラカードが人々の耳目を引いたのもこの時だった。

こうした事態に的確に対処する術も知恵も物量もなかった日本の支配層に対して、GHQの反応は迅速だった。即座に、輸入食料の放出を決定するなどの対策を講じ、実行に移し、人々の空腹と不平不満を多少なりとも和らげたのだった。

しかし、それは日本人民の食糧難を救う意図

のもとになされたというよりは、事態を放置すれば民主主義的な人民戦線が強固に結成され、旧支配層が一掃され、うっかりすると、共産主義革命すら起こりかねないという危機感に基づく措置だった。

マッカーサーは、翌20日には、この食糧メーデーのような大衆運動を暴力的な行為と決めつけ、断じて容認しない旨、言明したのである。

団塊の世代は、このような、庶民は日々の食料すら満足に手に入らないような貧しい、ひもじい、危機的な状況の中で産声を上げていた。**団塊出生秘話＝団塊世代が生まれたわけ** 前章3節「団塊世代の自画像（7）」で取り上げたJさんの説を、ここで少々、思い出していただきたい。

ポツダム宣言受諾の後、外地から内地から国家命令で兵士に仕立て上げられながら、生きながらえた若者たちは、引き揚げ船で、復員列車で、陸続と故郷へ、家族、妻のもとへと戻っていった。

これは、ポツダム宣言第9条に基づく帰結だった。そこには、「日本国軍隊は、完全に武装を解除せられたる後、各自の家庭に復帰し、平和的かつ生産的の生活を営むの機会を得しめらるべし」（外務省編『終戦史録』[1952年刊]）とあったのだ。

私は、このポツダム宣言第9条こそ、団塊世代生みの親だったと考えている。この宣言の起草者が意識していたか、いなかったかは別として、この規定は、長らく性行為に関しては禁欲的な生活を強いられてきた若者たち、あるいはJさんの説ではないが、内外の女性（例えば従軍慰安婦、売春婦等）の犠牲のもと、「いびつな私たち（金銭が介入した不特定多数の男女の交わり、権力や暴力による女性への性行為の強要等々）」で性欲を処理していた若者たち（これはごく少数ではあろうけれども）を、国家公認の性行為が出来る家庭へ帰す原点となったのであるから。

夫婦という男女のところへ性が帰ってきたのだ。

食欲は満たされない、知識欲も満たされない、勤労意欲も満たされない、そんな状況の中で、

唯一、満たされる可能性が出てきたのが、長らく抑制されてきた性欲だった。とするなら、「各自の家庭に復帰し、平和的かつ生産的の生活を営む機会」を得た若者たちが、夫婦相和して房事に励んだとしても何ら不思議ではない。現実、その時の歓びを率直に語ってくれた元出征兵士や士官の方々は少なくない。

一例を挙げておこう。さる帝国大学工学部出身で海軍技術将校として徴用されていたYさんは、無事、郷里に復員して、久々に妻と枕を共にした時の感激を、次のように明快にあげすけに語ってくれた。

「いやあ、あれ(=性行為の事・・・筆者注)が、こんなに気持ちええもんやったんか～思うて、嬉しいてしゃあなかったもんや。わし、生きてるんや～としみじみ感じたで。あれやれるだけでも、生きて帰ってきたかいがあったもんや思うてなあ。それからは、もう毎晩毎晩、欠かさずやりまくったもんや。カアちゃんも求めてきよったし、歓びよったしな」。

かくして、めでたくYさん夫妻は、二人の団塊世代の子の親となった。Yさん夫婦のような歓びを感じながら、その時、蒔いた種の結果として、幾人かの子どもをもうける夫婦は、当時、そこここに溢れていたのである。

こうした状況、こうした～Yさんのような～率直な感懐のもとで、後日、団塊の世代と称されることになる赤子が量産されることになったのだった。

## 2. 占領期あるいは団塊世代の幼年時代

**アメリカン・デモクラシーと占領統治** 日本  
の敗戦に伴って、日本に乗り込んできた～日本国内では「進駐軍」という名に化けた～占領軍等が主体となって、連合軍最高司令官総司令部つまりGHQが構成された。

連合軍云々とはいえ、ダグラス・マッカーサー元帥が総司令官であった事に象徴されるように、この組織はほとんどアメリカ合衆国、米軍管轄下にあったと言ってもけっして過言ではない。

このGHQの民政部には、F. ルーズベルト

米大統領のもと、ニュー・ディール政策実現に燃えた有能なリベラリストが少なからず在籍していた。彼らのなかには、アメリカ合衆国では果たせなかった夢を、日本で実現させようと意気込んでいた向きもあり、彼らの提言等をもとに、日本の民主主義的な改革がなされようとしていた。

今日でもそうだが、アメリカ合衆国官民には、アメリカン・デモクラシー(なるもの)こそ、最高の価値であり、至高の理念であるから、それをあまねく世界の《遅れた》国々にも行き渡らせることは、アメリカ合衆国のマニフェスト・デスティニーであるというような傲慢な思考が伏在していて、それが事ある毎に顕在化する。

2003年3月、アメリカ合衆国が、大量破壊兵器の隠蔽という事実無根だった事柄を口実にして、イラクに戦争を仕掛け、圧倒的な武力で同国を撃破し、占領した際にも、アラブの民のプライドやイスラム文化を無視して、アメリカン・デモクラシー(なるもの)を同国に押しつけようとするような動きが顕在化した。

かの偉大なメソポタミア文明発祥の地の民、強大を誇ったイスラム帝国の中心地の民のプライドと反欧米意識は高く、近代以降、欧米の帝国主義的侵略によって、国土を踏みにじられ続けた事への恨みは深い。

そうしたイラクの人々が、そう易々とアメリカ合衆国のいいなりになるわけもなく、困惑したジョージ・ブッシュJr. 政権は、早々に占領状態を解き、再独立させるという無責任極まりない対応をしたため、未だにイラク情勢は混乱の極みのままである。

ハンチントンの『文明の衝突』ではないが、イスラム教文明とキリスト教文明との衝突は、両宗教が成立して以降、果てしなく繰り広げられてきており、おいそれと本質的な和解、相互理解に至るとは思われない。

ところが、幸か不幸か、世界文明史的な観点から見て、けっして中心的存在となったことはなく、常に周縁的な存在に過ぎなかった日本(この点にかんしては、第4章でやや詳しく触れる)は、第二次世界大戦後、比較的、唯々諾々とアメリカ合衆国、米軍に従うことになる。

**戦後における日本民主化の限界** アメリカン・デモクラシーを至高の価値、理念として怪しまないアメリカ人が、中心的存在の文化文明を摂取する事には何らの痛痒を感じない、抵抗感も持たない日本人の国を占領支配し、そこをアメリカナイズしようというのであるから、それは比較的、容易な事であった。

少なくとも、アメリカ合衆国による、二十一世紀初頭におけるイラクに対する占領統治が大失敗だったとするなら、二十世紀半ばにおける日本の占領統治は大成功だったといえよう。今日に至るまで、日本を属国とまでは言わないにしても、従順な劣位の同盟国の立場に置いているのであるから。

ともかく戦後日本の歴史は、良きに付け悪しきに付け、アメリカ合衆国の多大な影響のもとで展開する。

占領後、日本の軍事力という牙を抜き取り、日本にアメリカン・デモクラシーを根付かせるため、日本を非軍事化、民主化する施策が、矢継ぎ早に発せられていく。

GHQは、はやくも1945年10月4日には、治安維持法の廃止、政治犯の釈放を指令し、その一週間後の11日には、マッカーサーが幣原喜重郎首相にいわゆる5大改革の実施を指令している。

それは、(1)女性の解放、(2)労働者の団結権の保障、(3)教育の自由化、(4)圧政・専制の排除、(5)経済の民主化、の5点であった。以降、暫くの間、GHQは、この線に沿って日本の改革を進めていく。5大改革は、自ずから日本に憲法改正を求めるものでもあった。

その後、GHQは、同年11月には財閥解体指令、12月には農地改革指令等、根幹的な改革指令を続々と発していった。

翌46年（昭和21）1月早々には、天皇が人間宣言を行い、GHQは、軍国主義者の公職追放を指令した。同月には、民主主義科学者協会が設立されたり、中国、延安から帰国した野坂参三を歓迎する国民大会が多数を集めて開催されるなど、日本は着実に民主化の道を歩み始めたかにみえた。

しかし、前述のような46年5月に起きた首

都での大規模な食糧メーデー等を契機として、早くもGHQによる日本の民主化路線には驕りが出てくる。

GHQ、その背後にあるアメリカ合衆国政府は、日本の民主化の行き過ぎ、さらには共産化を恐れつつあったのだ。

1947年（昭和22）1月に全官公労が2,1ゼネストを宣言したのに対し、GHQは、その前日、ゼネストの中止を指令した。これは、たった半年前にGHQが、日本政府に実施を指令した5大改革の(2)労働者の団結権の保障、労働組合結成の促進という項目とは全く矛盾する対応だった。

絶対権力の命令には屈するより他はなかった。日本の労働者の間には、一気にGHQへの失望感が拡がっていった。GHQによる日本の民主化に明らかな限界が見え始めたのだった。

**限界の中での歴史転回（1）** このような限界の中でも、紆余曲折を経て1946年11月3日には、明治欽定憲法とは大きく異なる、かなり民主的な日本国憲法が公布され、それは翌47年5月3日から施行された。

この改正憲法は、国民主権、基本的人権の尊重、戦争放棄を三つの柱としていた。

この頃から、続々と生まれ始めた団塊世代の少年少女たちは、後々、小学校や中学校へ進むと、学校の社会科の先生方が、誇らしげに、この憲法、そしてその三つの柱について語ってくれるのを、耳にする事になる。

同じ頃には、戦前教育の根幹を成していた教育勅語は廃された。代わって教育基本法、学校教育法が公布され、それに伴って、義務教育期間が延長され、6・3・3・4制のもと、戦後における民主主義的な教育が開始される事となった。

47年6月には、日教組（日本教職員組合）も発足した。再び、教え子を戦場には送らない、という日教組のアピールは、戦争の惨禍を目の当たりにした人々に強くアピールし、支持された。

同年7月には、GHQは、三菱商事や三井物産の解体指令を発している。財閥解体も軌道に乗るかに思われた。が、それも東西冷戦構造の

出来(しゅったい)や朝鮮戦争の勃発によって、日本を、完全にアメリカ合衆国の世界戦略の中に組み込み、「反共の防壁」にするという意図のもと、日本経済の復活・強化を目論む同国政府およびGHQの方針転換により、極めて中途半端な段階でおわってしまった。

結局、戦後復興、朝鮮特需、高度経済成長の時期を経て、もとのままのかたちでこそないが、財閥的な存在は見事に復活してくるのだった。

同年10月には、前年、既に「天皇を裁く事はせず」と述べていた、極東国際軍事裁判のキーナン検事が「天皇や財界には戦争責任は存せず」と明言した。

日本国憲法において、天皇が日本国および日本国民統合の象徴とされた事や、このキーナン発言あたりから、戦争責任に関する天皇の免責、天皇制のかたちをかえての存続が自明の前提のように人々に受け取られるようになっていった。

**限界の中での歴史転回(2)** 1947年12月には、改正民法が公布され、女性を「家」に縛り付ける役割を果たしていた家族制度が廃止され、同月中には強大な権力を握っていた内務省も解体される事になった。

1948年(昭和23)に入るやいな、ロイヤル米陸軍長官は「日本は全体主義に対する防壁である」と言明する。それと軌を一にするかのように、この頃からGHQは、日本に於ける大規模デモ計画に対して中止指令を連発したり、公務員の争議禁止を主張するようになってきた。

日本を「反共の防壁」とするには、その壁があまり「赤がかっている」とまずいというアメリカ合衆国政府、米軍の思惑は見え見えだった。

同年11月12日には、極東国際軍事裁判の判決が下り、東条英機以下、7名の絞首刑等が決まり、12月23日には東条らは刑に処せられた。が、他方では、翌24日には東条内閣で商工大臣の要職にあった岸信介他のA級戦犯容疑者が釈放されている。

その後、岸は極めて親米的な首相となり、1960年(昭和35)の日米安保条約改定の立役者になっている。よく出来た話と言えよう。勿論、米軍の二度に渡る原爆投下、無差別爆撃等

は裁かれるはずもなかった。

1949年(昭和24)5月には、商工省が廃止され通産省が置かれた。高度経済成長を担う日本株式会社の官側の司令塔の設置がここに成った。

この年あたりからは、大学教授等に対するレッドパージが日程に上ってきた。そして、同年夏には、下山事件、三鷹事件、松川事件といった奇怪な大事件が頻発している。世相は決して明るくなかった。

そんな折り、同年11月、京大教授の湯川秀樹博士がノーベル物理学賞を受賞し、暗い世相の一隅に明かりを灯した。団塊世代末期およびその直後の世代に、「秀樹」氏および「〇樹」氏が多い所以である。

私の周辺にも、秀樹君は勿論のこと、直樹君、俊樹君、一樹君、和樹君、秀雄君、秀子ちゃん等々、湯川博士にあやかろうしたであろう親の期待を一身に集めた子どもたちが沢山いた。

同じ頃、中国大陸では、国民党政権と対峙していた中国共産党が、圧倒的な人民の支持を受けて、中華人民共和国を成立させた。ソ連や東欧諸国は直ちに、同国を承認する。

この中国大陸における大きな歴史転回も、アメリカ合衆国の対日占領政策に変化をもたらす契機になった。すなわち、蒋介石の国民党政権を後押ししていた同国は、もはや台湾に逃れた同政権に多くを望む事は出来なくなった分、日本を早く経済的に自立させて、ドミノ的に日本が共産化する事を食い止め、自らの世界戦略上の盤石な拠点に仕立て上げる必要性に迫られたのだった。

**限界の中での歴史転回(3)** 1950年(昭和25)に入ると、年初早々、マッカーサーは、日本の自衛権の強化に言及し、1月末に来日したブラッドレー米統合参謀本部議長は、日本、沖縄の永続的な米軍事基地化を目論む旨の発言を残して離日した。ブラッドレーらは同年6月にも来日、日本の極東における米軍事拠点化、沖縄の恒久的な軍事基地化に向けて、大きな役割を果たしている。

この年には、マッカーサーは、共産党の非合法化を図り、共産党中央委員会の解散および全

メンバーの追放を指令したりする一方で、警察予備隊創設を指令したり、一万名に上る軍国主義者や軍国主義協力者の公職追放解除を容認したりしている。

GHQによって、日本国内の体制は、民主化、非軍事化より、保守勢力の復活、反共シフトが優先されていくことになった。レッドパージも各方面に及んでいった。

50年6月には、朝鮮戦争が勃発。漸く日本の植民地支配から逃れられたと思った矢先、48年に北緯38度線を挟んで、大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国という民族分断国家成立という悲哀を味わった朝鮮半島の人々は、今度は自らの意志とは何らの関わりもないままに、戦乱に巻き込まれてしまったのだった。

それを尻目に、旧宗主国の日本は国連軍（最高司令官はマッカーサー）という名の殆ど米軍の後方基地として、物資補給や修理の役回りを引き受け、軍事関連物資等々の受注などにより、火事場の焼け太りよろしく、日本の経済界は活況を呈するようになる。いわゆる朝鮮特需の成せるわざである。

これを機に、日本経済は一気に好転することになった。その後、この戦争は米中の代理戦争のような様相を呈しながら、一進一退を繰り返した。

3年間に渡って、朝鮮人民を苦しめた朝鮮戦争は、ようやく1953年（昭和28）7月、休戦に至った。ただし、現在もまだ、休戦状態に過ぎないので、分断当時の北緯38度線が、そのまま休戦ラインになっている。

朝鮮戦争勃発後間もない50年9月、トルーマン米大統領は、自国の世界戦略を有利に運ぶ意図をもって、対日講話交渉の開始を指令した。

**限界の中での歴史転回（4）** 1951年（昭和26）初頭には、マッカーサーが早急な講和および日本の再軍備を主張し、1月末、アメリカ合衆国政府の講和方針説明のために日本を訪れたダレス米特使は、講和後も米軍が日本に引き続いて駐留する事、日本を集団安全保障体制に組み込む事等を言明した。

日本は否応なく、アメリカ合衆国の世界戦略の中で極東の核として位置付けられていく事に

なったのだった。また当時の吉田茂を首班とする日本政府もそうした同国の方針に唯々諾々として従っていた。

こうした状況は、長らく占領下の日本で最高権力者として振る舞っていたマッカーサーが、51年4月、トルーマン大統領によって総司令官を解任されても何ら変わらなかった。

同年9月、サンフランシスコで対日講話会議が開催されたが、中国は招かれず、インドやビルマは参加せず、ソ連やチェコスロバキア等は調印を拒否した。こうした中で、アメリカ合衆国主導の対日講話が実現、対日平和条約とともに、日米間のみにおいて日米安全保障条約が調印された。

ポツダム宣言の第12条は、「・・・諸目的が達成せられ、日本国国民の自由に表明せる意志に従い、平和的傾向を有し、且つ責任ある政府が樹立せらるるにおいては、連合国の占領軍は直ちに日本国より撤収せらるべし」（同前『終戦史録』）と謳っていた。

が、「・・・日本国は、その防衛のための暫定措置として、日本国に対する武力攻撃を阻止するため日本国内及びその附近にアメリカ合衆国がその軍隊を維持することを希望する」という「日米安保条約」前文[法令全書]の文言を担保として、日本には、占領軍が駐留軍と名を変えて堂々と居座ることになった。

翌年に結ばれた日米行政協定により、日本国内には六百カ所を越す米軍基地、軍事関連施設が置かれることになり、米軍は日本国内の騒擾、騒乱にも出動することになった。

他国の日本への侵略を防止するという表向きの理由と、国内反体制派の抑圧とどちらに重きが置かれているのか疑わしいような条約だった。日満議定書に酷似していると言われる所以である。

講和を巡っては、日本国内では、全面講和を希求する運動も活発化した。当時、大学に勤務していた私の父も同僚や学生たちとともに全面講和論を支持していた。短期間に、四百万を上回る署名が集まったが、事は成らなかった。

このような経緯の中で、日本は、それこそ「いびつなかたち」ではあったが、長年に渡る占領



状態から脱し、1952年（昭和27）4月、講和条約の発効に伴い、足かけ七年ぶりに国際社会の一員として遇されることになった。

このような戦後の激動の中で生を受け、幼年時代を送り、少年時代へと差しかかっていったのが団塊世代であった。

余談だが、ごく一部の支配層、富裕層を除く、多くの国民が殆ど栄養不良のような状態の中で生まれてきた団塊世代であるから、彼らが母親の胎内にいた頃や、その幼年時代の栄養状態はあまり良くなかったと言わざるを得ない。従って、体力的に脆弱な面を持ち合わせるであろう彼らが高齢に達した時の疾病や、その自立度に懸念を示す向きもある。

団塊世代には、この頃に関する直接的な記憶はまだない。しかし、多くの団塊世代は、その親たちの口から、特攻、玉砕、空襲、学童疎開、敗戦等々、戦争に関連する様々な語彙や、マッカーサーとかリッジウェー（マッカーサー罷免後の後任）とか、ドッジ・ラインとか、占領とか、ヤミ市とか、買い出し列車とか、「曲学阿世の輩」（全面講和を唱えた南原繁東大総長に対して、吉田茂首相が浴びせた罵声・・・私の父も、「この吉田発言は単に一人、南原繁東大総長を非難する言葉にあらず。全学問人を侮辱するものだ」と憤っていた）等、その当時を物語る語彙を数多く聞きながら成長していった。

### 3. 50年代～60年代前半あるいは団塊世代の少年時代

**独立後の日本** 1950年代から1960年代前半にかけては、団塊世代にとっては、花の少年少女時代だった。

50年代初頭といえ、日本は49年以降のインフレ是正のためのドッジ・ラインに基づくデフレ下であって不況風が吹きすさび、敗戦後、暫くの間、熱気が漂った民主化への道は滞り、よどみ始めていた。それでも敗戦の混乱からは、少しずつ脱却し、世相もやや落ち着いてきた頃だった。

しかも朝鮮戦争勃発以降は、ドッジ・デフレ下の不況を一気に吹き飛ばす効果をもたらした

特需のおかげで、産業界は息を吹き返し始めていた。これを「天佑」などと言う、朝鮮人民の苦難を想像し得ない心ない向きもあった。

全面講和か、単独講和かという国論を二分した論争も、結局は、アメリカ合衆国およびそれに追従する吉田民主自由党政権によって、後者に落ち着く。アジアにおける反共陣営の一員としての日本の国際社会への再デビューだった。

1952年4月、対日講和条約、日米安保条約が発効した日には、吉田政権はダレスとの約束通り、手回しよく、中国大陸を追われ、台湾に逃れた蒋介石の国民政府との間に平和条約を結んだ。

反共産主義、大陸反攻を叫ぶ国民政府と手を結ぶことは、取りも直さず、中国大陸を実効的に支配する中華人民共和国を敵に回すことを意味していた。

この直後、5月1日のメーデーには、多数の労働者、大衆が参加し、生活の安定や日本の米軍事基地化反対を叫んだ。そのうち、立ち入り禁止とされていた皇居前広場に入った人々と警官隊とが真正面から衝突し、警官隊の暴行によって千名を超す死傷者が出た。「血のメーデー」と称される所以である。

根強い反対運動にも関わらず、7月には、破壊活動防止法が公布され、公安調査庁が設置された。8月には、警察予備隊と海上警備隊とを統合するかたちで保安庁も発足、再軍備に向けての準備が進むとともに、反体制的な活動、左翼的な活動に対する網が綿密に被せられていく。

つまるところ、50年代初頭には、民主化とは程遠い状況が現出し始めていたのだが、その頃には日本の支配層、財界にとっては誠に都合なことに、休戦合意後も3年間に渡って続くことになる朝鮮特需によって、日本経済はまさに起死回生、一挙に潤い始め、戦前の水準を上回り始めていたのだった。

**基地反対闘争と米軍人の感懐** 個々の人々が、豊かになったわけでは、毛頭ないけれども、国家の経済状態が好転してきたことで、世相には落ち着きが出てきた。ここらあたりで、戦後復興期から長きに渡る驚異的な経済成長期へと移行する道筋が付けられていくことになったと

いえよう。

他方、独立を勝ち得たにも拘わらず、外国の軍隊が日本国内に駐留し続け、施政権が返還されなかった沖縄は言うに及ばず、日本全国各地の米軍基地が恒久化され、射爆場のような付近住民に生命の危険をおよぼすような施設が造られていこうとするのに対する反対闘争が繰り広げられたのもこの頃だった。

1953年（昭和28）6月をピークとする石川県の内灘での米軍試射場にするための土地接收に対する闘争は、地元の農漁民だけでなく、革新政党ばかりか保守系野党まで巻き込み、日教組や国労等の労働組合まで参加する広範な運動として盛り上がった。

その背景には、日本の民主化を考えていた、初期の頃のGHQの強い教唆の下で公布、施行された労働組合法（1945年12月公布）や労働基準法（47年4月公布）により、戦前とは比較にならない程、労働者の権利が擁護されるようになっていたという事情があったことは否めない。

1950年代後半には、茨城県の東海村に設置された日本初の原子力関連施設に研究者として勤務していた私の父は、後日、この施設に隣接する米軍射爆演習場所の米軍中尉と諸々話をした折りに感じたことを次のように語ってくれたことがある。

上のような事情に関連して、その「米軍中尉は、そもそも『日本の復興も民主化もアメリカ合衆国とその軍隊のお蔭なのに、日本人は親の心子知らずで、恩を仇で返す』といった感懐を吐露して、悔しがっていた。これは、多くのアメリカ人の考えを代弁する声だったのだろう」と。この米軍中尉の感懐は、後にアメリカ合衆国内で顕在化してくる安保タダ乗り論につながっていく心情だったと言える。

1954年（昭和29）3月には、ビキニ環礁近海で操業中の日本漁船、第五福竜丸が、アメリカ合衆国の水爆実験の犠牲となって被爆した。半年後、同船の無線長だった久保山愛吉氏が原爆症で亡くなった。日本人にとって、3度目の被爆体験だった。

1955年（昭和30）5月には、北富士演習場

の拡張に反対する闘争が起こり、7月には、東京の砂川町で、基地拡張に反対する町民の総決起集会が開催され、闘争ののろしが上げられた。その後、測量を強行しようとする官憲側および警官隊と、反対住民たちと闘争を支援する全学連学生や労働者大衆との間の衝突で流血の惨事が起きた。世に言う砂川闘争である。これは、住民側の勝利で決着した。

少なからぬ世論は、日本の米軍事基地化、そして日本がアメリカ合衆国の世界戦略の中に体よく組み込まれていくことに危機感を覚えていた結果でもあった。

こうした各地での基地反対闘争等のエネルギーは明らかに時には伏流しながらも、1960年（昭和35）の安保闘争へと受け継がれていく。**五十五年体制へ** 1950年代には、京都に住んでいた私は、京都駅前とか、三条大橋のたもととか、四条河原町交差点近辺とか、出町界限とかで、「白衣の勇士」の姿をよく見かけた。

戦後数年間のうちに生まれた我々団塊世代は、まさに「戦争を知らない子どもたち」なのだが、親たちの戦争体験を聞いたり、兵隊帽を被り、白衣に身を包んだ傷痍軍人の人たちが、街角に佇み、物乞いをする有様を見、親に、その人たちの事を尋ねたりするなかで、皮膚感覚で戦争の悲惨さを学んでいったのだった。

当時は、市電の電停などで、たばこの吸い殻を拾い集める人たちを見かけることも少なくなかった。

戦後直後の、暫定的な東久邇内閣（1945. 8. 17～）や幣原内閣（1945. 10. 9～）の後、短命に終わった社会党の片山哲を首班とする内閣（1947. 5. 24～）、芦田均内閣（1948. 3. 10～）を挟む前後の期間、各政党が離合集散を繰り返すなかで、つごう6年間に渡る長期政権を維持した吉田茂も、1954年1月に表沙汰になった造船疑獄、犬飼法相の指揮権発動等々により、遂に民心どころか、財界の支持すら失っていった。

同年11月の自由党の再分裂を経て、12月、左右両派社会党及び日本民主党による吉田内閣不信任案成立を受けて吉田内閣は崩壊、政権は鳩山一郎の手に移った。

1955年(昭和30)には、鳩山人気の影響もあって、1951年10月以来、左派と右派に分裂していた社会党が危機感をバネに、左派の鈴木茂三郎を委員長として10月に合同した。翌11月には、対抗上、保守政党の側も日本民主党と自由党とが合同し、自由民主党を設立した(最初は代行委員制、翌56年4月の党大会で鳩山一郎を総裁に選任)。

これ以降、日本では長らく、いわゆる「55年体制」と称される、自社両党を中心とした国会模様が展開することになる。60年安保改定を巡る政治の季節頃までは、保守・革新のせめぎ合いには緊張感も漂ったが、日本経済が高度成長の波に乗ると、万年与党と万年野党による、時にもたれ合いが目につく国会運営が為され、国民のひんしゅくを買うことにもなった。

吉田の対米追従路線を批判した鳩山は、対ソ復交、「経済自立五カ年計画」を旗印に掲げた。この55年5月には、ソ連は、東ヨーロッパに構築した衛星諸国群と共に、～1949年に結成されていた北大西洋条約機構に対抗するかたちで～ワルシャワ条約機構(=共産主義陣営の軍事同盟=1991年3月解体)を結成、東西冷戦構造に一層の拍車がかかった。

他方、この年4月には、インドネシアのバンドンで、アジア・アフリカ会議がもたれ、ここでは、平和共存や互惠平等が強調され、その前年に中国の周恩来首相とインドのネール首相が発した平和5原則の共同声明を基礎にした平和10原則が採択されている。

これは、近代西欧の帝国主義、植民地主義によって踏みにじられてきたアジア・アフリカ29カ国の反帝国主義、反植民地主義そして世界平和に向けての強い意思表示であった。

鳩山内閣は、2月、対ソ交渉開始を決め、以後、紆余曲折を経て、翌1956年(昭和31)10月、日ソ両国は、国交回復に関する共同宣言を発し、サンフランシスコ講和条約締結から遅れること5年、国交を再開した。それに伴って、同年12月これまではソ連の拒否権行使によって阻まれていた日本の国連加盟が実現した。

#### 日本における原子力研究開発の開始(1)

1955年は、日本における原子力研究開発が

具体的に開始された年でもあった。しかし、それは日本の関係学者と政府との合意のもとに始められたものでもなければ、パブリック・アクセプタンスを得て開始されたものでもなかった。

百パーセント、アメリカ合衆国に追随する形で、学者の顔を札束でひっぱたいて(中曾根康弘発言)、始められたのである。

1953年12月、アイゼンハウアー米大統領は、第8回国連総会で、「原子力国際プール案」を提案した。提案の骨子は「原子力平和利用のため、国連に原子力機関を設置し、そこに各国がウラン等を供出する。アメリカ合衆国は、この平和利用計画推進に関してソ連と協力する」というものだった。

畢竟、核兵器開発における対ソ優位が揺らぎ始め、又、核燃料の備蓄に余剰が出てきたアメリカ合衆国が、原子力研究開発に関する自らの優位を保つための提唱だったといえる。

1954年3月、このアイク発言に迎合するように、改憲、再軍備を主張する改進黨の中曾根康弘代議士らが、原子力関係予算案を国会に提出した。学界の慎重論は退けられ、政財界主導で日本の原子力研究開発のひびたは切られてしまった。

後手に回ったものの、朝永振一郎博士、伏見康治博士ら、原子物理学の泰斗の活躍や、当時の日本学術会議のリベラルで民主的な雰囲気もあって、学術会議第17回総会は、原子力に関する声明を発表した。

それは、原子兵器に関する研究は一切、行っってはならないとの決意を表明し、その決意を保証するために公開・自主・民主の「原子力平和利用3原則」を表明したものだ。

さらに、学術会議は、唐突な原子力関係予算の出現を容認した吉田茂首相に抗議声明を出している。当時の学界には、勿論、御用学者もいたが、筋を通し、権力に対しても言うべき事はキチンと言うリベラルな学者が多数いた。

しかし、1955年に入ると、6月には日米原子力協定の仮調印、11月には本調印がなされ、同協定は12月の第23臨時国会の承認を得て発効した。同月には、原子力基本法、原子力委

員会設置法も公布された。

### 日本における原子力研究開発の開始（2）

原子力基本法には、先の「原子力平和利用3原則」の精神が盛り込まれたことは不幸中の幸いだった。この頃の学界には自らの見解を政治状況にも反映させようという息吹きがあり、政界にも少しは学界の言うことも聞く度量があったのである。

1956年1月には、原子力委員会が発足、初代委員には、湯川秀樹京都大学教授、藤岡由夫東京教育大学教授、有沢広巳東京大学教授、石川一郎経済団体連合会（経団連）会長が就任、委員長には正力松太郎読売新聞社主が納まった。

早速、同委員会のもとで、原子力研究所等の設置場所の選定作業が始まったが、結局は必ずしも同委の意向が反映されないままに、政治的思惑等々が介在するなか、同年4月には、その敷地は茨城県那珂郡東海村に決定したのだった。

56年3月、日本原子力産業会議設立。5月、原子力3法（日本原子力研究所法等）公布。6月、特殊法人として日本原子力研究所が本格的に始動。8月、原子燃料公社（後の動力炉・核燃料開発事業団）発足。11月、日米ウラン貸与協定調印。

57年2月には、電力各社が原子力発電への主体的参画を決定。5月、学界の核燃料自主製造の主張にも関わらず、政財界主導で、アメリカ合衆国産の濃縮ウランが燃料として導入される。

8月、東海村の日本原子力研究所に設置された実験用原子炉臨界。日本に初めて「原子の火」が灯った。各新聞は、一面トップでこの事実を大々的に報道。「原子力元年」、「原始の村に原子の火」等々と喧伝された。

11月には、日本原子力発電株式会社が発足し、商業用原子炉の運転に向けての業務を始めた。

このように、日本における、原子力研究開発は、アメリカ合衆国の思惑に迎合するかたちで、政財界主導の下、急ピッチで勧められていくことになったのだった。学界の意向は必ずしも反

映されなくなっていた。

こうした動勢に不満を抱いた湯川秀樹博士は、1957年3月、原子力委員を辞した。

1959年（昭和34）1月には、日本原子力研究所において国産第1号原子炉が起工、同年3月には、原子燃料公社の研究グループが、初めて国産の金属ウラン精錬に成功した。この研究の輪のなかには、核燃料や原子炉の国産、すなわち原子力の自主的な研究開発を強く主張していた私の父もいた。

1962年（昭和37）9月に至って、国産第1号の研究用原子炉が臨界に達した（日本の原子力研究開発の動向に関して、詳しくは拙論「原子力研究開発黎明期における地域社会の動向」[『地方紙研究』158号、1979年]、「原子力研究開発黎明期における中央の動向」[『東海女子大学紀要』9号、1990年]、「1950年代半ばにおける日本の原子力事情」[同上10号、1991年]、「国際的関連から見た日本の初期原子力研究開発」[同上11号1992年]、「日本の原子力研究開発初期における確執の諸相」[同上12号、1993年]等を参照されたい)。

**田舎の団塊っ子小学生たち（1）** 1944年（昭和19）9月に京都帝国大学工学部を卒業した私の父は、中島飛行機に入社したが、その僅か二ヶ月後には、軍に招集され、陸軍二等兵として工兵隊に配属され、敗戦に至るまで軍隊生活を強いられた。

そして、敗戦から半年も経たない1946年1月、京都大学に復帰、以後、母校の助手、専任講師として12年間、学究生活に勤しんでいた。

その父が、慣れ親しんだ京都を離れて、東海村に赴任したのは1958年（昭和33）2月のことだった。半年遅れで、家族も京都から、この村に引っ越した。私は小学校の三年生半ばだったが、都会の団塊っ子たちと別れを告げ、田舎の団塊っ子たちと交遊することになった。

この頃になると、団塊世代の記憶は明瞭に残っている。

当時、小学生がすぐ適応するには、千有余年の都の地・京都市と、北関東の名もない一寒村・東海村との文化的落差や自然環境の違いはあまりにも大き過ぎた。

その頃の東海村は、舗装道路もなく、散在する藁葺き屋根の家々と松林と砂浜だけのところだった。夜の東海村で聞こえてくるのは、潮騒の音のみだった。

私が京都で通っていた小学校は、御所に隣接する立派な鉄筋コンクリート造り。全国の給食モデル校で、勿論、定番の脱脂粉乳とクジラ肉はよく出たが、結構、味もよく、パンも美味しかった。それを体験している身には東海村の小学校の給食はしばしば喉を通らなかった。

その事や、話し言葉が全く違う事、服装が違う事等を理由にして、いじめられたりもした。しかし、田舎の団塊っ子たちのいじめは陰湿なものではなく、打ち解けてきて、言葉も理解し合えるようになると、仲良くなり、藁葺き屋根の家にも招いてくれたりするようになった。

彼らの家は、藁葺き屋根で、広い土間があり、井戸水だった。軒先には藁を敷いたうえに、サツマイモを縦に平たく切ったものが無数に並べて干してあった。かくれんぼ、缶蹴り、鬼ごっこ、チャンバラごっこ、メンコ遊び、ベーゴマ遊び等に飽き、疲れ、お腹をすかすと、田舎の団塊っ子たちは、藁敷きの近くに座り、その「カンソイモ」を食べ始めた。

私にも「食ったらいがっぺ」「食べたらいいでしようよ〜」と勧めてくれるのだった。

始めは、表面に吹きだしている白い粉が気味悪かったが、食べてみると案外、美味しかった。忙しい彼らの母親の農婦が、それを焼いてくれると、プーンと香ばしい匂いがして美味しさも増すのだった。

**田舎の団塊っ子小学生たち(2)** 都会の団塊っ子だった私には、肥溜めなどという存在は全く未知のものだった。だから、東海村に引っ越して間もない頃には、かくれんぼ等の最中に、うまく隠れるつもりが肥溜めに落ちてしまい、うんこまみれになってしまうことも一度ならずあった。

そんな時には、肥溜めにも、うんこまみれにも慣れている田舎の団塊っ子たちは、べそをかいている私を近くの川に連れて行って、服を脱がせ、川水でうんこを洗い流してくれるのだった。大都会では、決して味わえない小学生の友

情の証だった。

その川では、鮒(ふな)を釣ったり、ドジョウやカエルやオタマジャクシを捕まえたり、シジミを捕ったりした。森でカブトムシやクワガタムシを捕ったり、山でウサギを追ったり、キノコ採りをしたりした。田舎の団塊っ子たちと日がな一日、自然と戯れながら遊ぶ日々だった。

「村の鎮守の神様の今日はめでたいお祭り日、・・・ドンドンヒャララ、ドンヒャララ・・・朝から聞こえる笛・太鼓・・・」という小学校で習った歌が、そのまま村のハレの日の光景だった。まだ、ハレとケ(さらにはケガレ)、日常と非日常とが、はっきり厳別できるような村の生活だった。

昨今、見直されている昭和30年代だが、単なる懐古趣味的観点ではなく、文明史的に考えても、確かに、あの頃には今はもう失われてしまった人情や風物が沢山あった。

前章で、作家のBさんが述べているように「近所の知らないお兄さんが遠くまで自転車の後ろに乗せて連れて行ってくれた」ような、そんな記憶を蘇らせることができる時代だった。これは、決して団塊世代の作家が心に描く感傷的な心象風景などではなく、実際に自らが体験した光景だったのだ。その体験は私のものでもあった。

中学校を卒業して、都会へ出て行くことになった東海村のウチの近所に住んでいた農家の三男のお兄さんが、上京する2,3日前に、私を自転車の後ろに乗せて、川沿いの道を何時間も走ってくれたことがあった。時々、乗せてくれる人だった。

「もうすぐ、仕事始まっからよう、そうすっと、おめのこと乗っけてやんねから、今日は遠くまで行くべ」と言って、夕日に向かって、ペダルを漕ぎ続けてくれたのだった。

こんな心優しい近所のお兄さんがいた時代だった。

**もはや戦後ではない** 1956年の『経済白書』は、「もはや戦後ではない」と述べている。戦後10年を経て、折りから始まろうとしていた神武景気の下、設備投資が活発化し、工業生産は戦前の二倍となり、輸出も好調、個々の国民

の所得も増加するなかで、復興の時期は終わったという政府の強気の姿勢を示したものといえよう。

この年には、日本の造船高は世界一になっている。同年末には、鳩山一郎が引退し、石橋湛山が総理総裁に就任した。しかし翌57年2月には、石橋首相は病氣辞任、首相臨時代理をしていた岸信介外相が首相となった。

岸首相は、1月末に起きた、ジラード事件（相馬が原米軍射撃演習場で葉莢拾いをしていて日本人農婦を米兵が射殺した事件）の解決を突破口として、不平等な日米安保条約改定に意を用いる。しかし、ジラード事件は、懲役3年（執行猶予4年）という極めて軽微な有罪判決（57年11月）に終わり、在日米軍基地への風当たりは強まり、安保反対闘争へと連なっていく。

1958年9月には、ジョンソン空軍基地（埼玉）所属の米兵が、西武鉄道の電車に向けて発砲、乗客が亡くなるという事件が起きた。1959年6月には、沖縄で米軍飛行機が小学校に墜落、二十名を上回る犠牲者を出した。在日米軍基地の存在のために、無辜の日本人が殺傷されたり、強姦されたりといった事件は当初から今日に至るまで後を絶たない。

国家の安全のためには、個人の安全は脅かされてもよいのだろうか。

こうしたなかで、58年10月からは、公然と日米安全保障条約改定のための交渉が開始された。同月、岸首相は、日本国憲法第9条廃止を唱えた。戦前への回帰が懸念される事態となってきた。

余談ながら、同年12月末、エッフェル塔より高いと喧伝された東京タワーが完成した。田舎の団塊っ子だった私は、わざわざ父母ともども東海村からタワー見物に東京へやって来た。あまりの高さに足がすくんだ。

**安保改定を巡る動き** 1955年から57年にかけての神武景気、1959年から61年（昭和36）にかけての岩戸景気、そして1963年（昭和38）から64年（昭和39）にかけての五輪景気、さらには1965年（昭和40）から70年（昭和45）にかけてのいざなぎ景気と、それぞれの合間合間に不況を挟みながらも、1973年（昭

和48）10月の石油ショックに至るまで、日本は十八年近い期間に渡って右肩上がりの経済成長を続けた。

これが世に言う高度経済成長期である。この期間の前半部分が、団塊世代の少年時代に重なる。

1950年代後半から、教育に関する中央集権化、国家統制の動きが活発化してくる。これは、戦後民主主義教育のあり方に対する支配層、国家権力の危機感の現れだった。かつては、文部省自らが民主主義教育の旗手になるかと思われたこともあったが、それはしよせん無い物ねだりだった。

文部省は、教科書調査官や視学委員を設置したり、勤務評定の徹底、教頭の権力強化を図るなど、教科内容や学校現場に対する統制管理を強めようとし始めたのだった。

それに対して、当時はまだ強い力を持っていた日教組等は全国規模で勤評反対集会を展開した。教育現場のみならず、さまざまな労働の現場でも、労働争議が多発していた。59年には、かの三井三池争議も始まっていた。

こうしたなかで、1960年初頭には、安保条約改定交渉が妥結、1月半ば、新安保条約調印のために岸首相らの全権団がアメリカ合衆国に向けて出発した。その際、全権団の出発を阻止しようとする多数の全学連学生たちが羽田空港で座り込みの闘争を繰り広げた。

しかし、19日には、日米の全権団は新安保条約（日米相互協力及び安全保障条約）や米軍の地位協定等に調印し、後は国会の承認を待つばかりとなった。戦いの場は国会周辺へと移った。

同年5月半ばから6月半ばにかけて、国会周辺は「安保粉碎」一色に染まった。けれども、安保阻止国民会議が数波に渡り十万人をゆうに超す規模のデモを展開するなかで、自民党は新安保条約や地位協定を強行採決した。

それに対して、全学連は首相官邸や国会に直接入り込む抗議行動を起こし、警官隊と激突した。6月15日には、東大生の樺美智子さんが落命、各大学に抗議行動が広がっていった。事の重大さに驚いた政府は、アイゼンハウアー米

大統領の訪日延期をアメリカ合衆国政府に要請するに至る。

18, 19 両日に渡っては、三十数万人のデモ隊が国会を取り囲んだ。しかし、19日に新安保条約は自然成立、23日には同条約批准書が日米間で交換され、遂に同条約は発効することになった。

**60年安保と団塊世代** 岸首相は安保改定を巡るなかで事態の混乱を招いた責任を取って辞任、7月には池田勇人を首班とする内閣が成立した。

この60年安保の頃には、団塊世代は既に11～13歳の少年少女になっていた。まだテレビはさほど各家庭に普及していなかったとはいえ、ラジオや新聞の報道や親たちが論評するのを聞いたりして、団塊っ子たちは、日本の行く末に重大な影響を及ぼすであろう大きな曲がり角に自分たちが立っていることを実感していた。

私自身も、国会周辺を埋め尽くすデモ隊の新聞掲載写真等を見ては、子どもながらに、どうして、こういう事態が起きているのか等々、父の帰宅を待っては連日質問したことをよく覚えている。

父は、仕事で疲れているにもかかわらず、いつも明快に解説してくれた。戦争の惨禍、軍隊という組織の非情さを知る父は、日本国憲法第9条をものすごく大切に思っていた。したがって、その9条の廃止、その線上に再軍備を目論んでいるような岸首相を蛇蝎のごとく嫌っていた。

日米安保条約の不平等性も熟知していたようで、子どもにも分かり易いように説明してくれた。

私 「どうして、あんなに沢山の人が国会議事堂の回りにいるの？」

父 「それはね、あの中に岸っていう人がいて、もう戦争はしない、軍隊は嫌だっという日本人の気持ちを踏みにじって、アメリカの軍隊を日本に置いておこうとしているから、それに反対する人たちが抗議の為に集まっているんだよ」

前章に登場する団塊世代の高校教師Fさんも、60年安保の頃には、やはり高校教師だった父親が自身の憤懣やるかたない気持ちを、Fさんやその兄に語っていた事を思い出すとしよう。Bさんしかり。Dさんしかり。「あのとき、親父、怒ってたなあ」、「どうもうちの父もデモの隊列に加わってたみたいだぜ」といった記憶を甦らせてくれた。

その他、聞き書きに応じてくれた団塊世代の人たちも、60年安保の時の事は、まだ幼いながら、結構よく覚えていると答えている。この安保闘争は、少年少女の記憶にも残る重大な意味を持つ闘争だったといえよう。

樺美智子さんの死には、私も子どもなりに衝撃を受けていた。私は、うっすらと「自分も大学生になったら、ああいう行動をするのかなあ」などと考えていた。これは一人私の記憶ではなく、少なからぬ団塊世代の人びとが甦らせてくれた記憶だった。

団塊世代の少年少女時代における60年安保の際の、このよううっすらした認識が、その世代が大学生になった時の大学闘争への何らかのかたちでの参画の底流になっているのかもしれない。

〈以下、「同時代史としての団塊世代（後編）」に続く。〉